

原著論文

Elfreda A. Chatman の研究視点が情報利用研究に持つ意義

Implications of Elfreda A. Chatman's Viewpoint for User Studies

粟村倫久

Norihisa AWAMURA

Résumé

Purpose and Method: The purpose of this study was to elucidate the implications of Elfreda A. Chatman's viewpoint for user studies. This study tries to understand Chatman's study by dividing it into a Pre-Theoretical Period and a Theoretical Period. First, what she attempted to discuss in the Pre-Theoretical Period is delineated. Based upon this understanding, an integrated interpretation of her theories is provided, then the implications of her viewpoint for the development of user studies are discussed.

Results: At the end of the Pre-Theoretical Period, Chatman made a discovery which indicated that the maintenance of interpersonal relationships was always a primary concern of poor people during information seeking and use (ISU), rather than relying on such relationships without any inhibition. This discovery led her to a new way of looking at information poverty and ISU of the poor, which was developed in the ensuring period. Chatman developed her new understanding of ISU in the Theoretical Period. This distinct understanding, not like past studies, focused on ISU as a part of maintaining a "taken-for-granted life". This understanding contributed to the advance of user studies because it made it possible to capture intersubjectivity and reflexivity between ISU and society. This is one of the implications of her viewpoint. Three future research issues can be elicited as implications other than those of Chatman's theories. The first is to expand the subject of analysis, especially analysis of ISU in organizations. The second is to explore the process of creation and revision of knowledge, beyond merely exploring the use and maintenance of knowledge as Chatman did. The third is to analyze more deeply the interrelationship between ISU and its situation.

- I. Elfreda A. Chatman の再検討の必要性和検討課題・枠組み
 - A. Elfreda A. Chatman の再検討の必要性：本研究の目的
 - B. 検討課題と検討枠組み

粟村倫久：慶應義塾大学大学院文学研究科図書館・情報学専攻，日本学術振興会特別研究員

Norihisa AWAMURA: Graduate School of Library and Information Science, Keio University, and Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science

e-mail: awamura@slis.keio.ac.jp

受付日：2009年3月15日 改訂稿受付日：2009年6月12日 受理日：2009年8月6日

- II. 情報普及の観点からの検討による情報貧困、貧困者の情報探索・利用の再発見期
 - A. 研究目的・研究対象・研究方法論
 - B. 特筆すべき点
 - C. 理論形成期第1期の議論のまとめ
- III. 貧困者の情報世界の分析の深化期
 - A. 研究目的・研究対象・研究方法論
 - B. 特筆すべき点
 - C. 理論形成期第2期のまとめ
- IV. 情報貧困、貧困者の情報探索・利用のとらえ方の転換につながる発見期
 - A. 研究目的・研究対象・研究方法論
 - B. 特筆すべき点
 - C. 理論形成期第3期のまとめ：なぜ「情報貧困、貧困者の情報探索の利用の
とらえ方の転換につながる発見」期なのか
- V. 理論提示期
 - A. Chatman の理論の形式面の特徴
 - B. 個々の理論の内容
 - C. 理論提示期の情報世界
 - D. Chatman の情報探索・利用理解の独自性の考察
- VI. Chatman の研究視点の展開の方向性
 - A. 分析対象の拡大：特に組織体における情報探索・利用を扱うこと
 - B. 知識の作成・修正プロセスの探究
 - C. 状況と情報探索・利用の相互関係のより詳細な探究
 - D. 理論構築以外の研究方法論についての示唆
- VII. 結論と今後の研究課題
 - A. 結論
 - B. 今後の研究課題

I. Elfreda A. Chatman の再検討の 必要性と検討課題・枠組み

A. Elfreda A. Chatman の再検討の必要性：本 研究の目的

Karen E. Pettigrew らは、情報利用研究のいわゆるパラダイム・シフト¹⁾以降の展開を次のように説明している。まず、研究の主流となったのは、認知的視点である。認知的視点とは、個人の内部の認知的・情緒的要因に応じて、情報探索・利用のプロセスが行われる、とする視点である。この視点は、個人の内的構造が文脈いかんにかかわらず共通した構造を持つもの、つまり文脈から独立したものとみなす。そして、情報探索・利用

のプロセスは、上記の個人の内的構造に対応して構成されるとみなされ、文脈独立的な基本パターンを持つものとされる。以上の視点の下、個人の内的構造と情報探索・利用パターンの関係の解明が考察の主題となる。Pettigrew らの論文には、認知的視点をとる研究として、この視点の嚆矢である Robert S. Taylor に始まり、Nicholas J. Belkin, David Ellis, Brenda Dervin, Carol C. Kuhlthau, Marcia J. Bates, Thomas D. Wilson, Sanda Eldelez ら、さまざまな研究者による研究が挙げられている²⁾ [p. 46-54]。

Pettigrew らは、上記の認知的視点に対する整理に次いで、1990年代に社会的視点をとる情報利用研究が登場し、それが増加していったと論じ

ている。この社会的視点は、対人関係とそこでの力学(dynamics)が、情報のやりとりに及ぼす影響に焦点を当てる。並んで、対人関係とそこでの力学が、人間のコミュニケーションの一側面としての情報共有のなされ方に及ぼす影響の理解にも焦点を当てる。ここで、情報や情報探索・利用は、個人の内部というよりも、対人コミュニケーションの中で構築される構築物だとみなされている。Pettigrewらは、これまでの社会的視点を取る研究として、Elfreda A. Chatman, Tuominenと Savolainen, Pettigrewらによる研究を挙げている²⁾ [p. 54-59]。

Pettigrewらは、認知的視点をとる研究と社会的視点をとる研究の焦点の違いに、次の主旨の説明を与えている。認知的視点は、個人の内的構造と情報探索・利用パターンを分析単位とする。そこでは、対人関係等は、個人の内的構造と情報探索・利用パターンの変化に影響する変数として扱われる。一方で、対人関係が具体的にどのようなものか、情報探索・利用が対人コミュニケーションのどのような一側面となっているか、ということは認知的視点の焦点からは外れる。

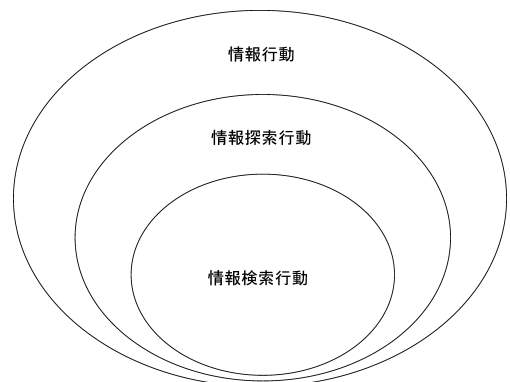
そして、社会的視点の焦点は対人コミュニケーションにある。対人コミュニケーションの一側面として情報や情報探索・利用が構築されるとみなすのだから、自然と、分析単位も個人の意味構築から対人コミュニケーションの構成とその諸側面へと移される。つまり、情報ないし意味は、対人コミュニケーションの文脈を形づくっているさまざまな事物(相互行為、物理的セッティング、社会規範、言語など)間の関係を形づくる一部として研究される。研究方法論としては、活動全体をありのままの場面において扱う方法論(naturalistic approach)が採用される傾向にある²⁾ [p. 53-54, 59]。

Pettigrewらによれば、上記の社会的視点の研究関心に沿った研究は、多様な研究視点と結びつきながら、増加の一途にある²⁾ [p. 59]。このような社会的視点をとる研究の登場の背景には、Pertti Vakkariや田村俊作が論じるように、認知的視点による研究が個人の意味構築のプロセスに

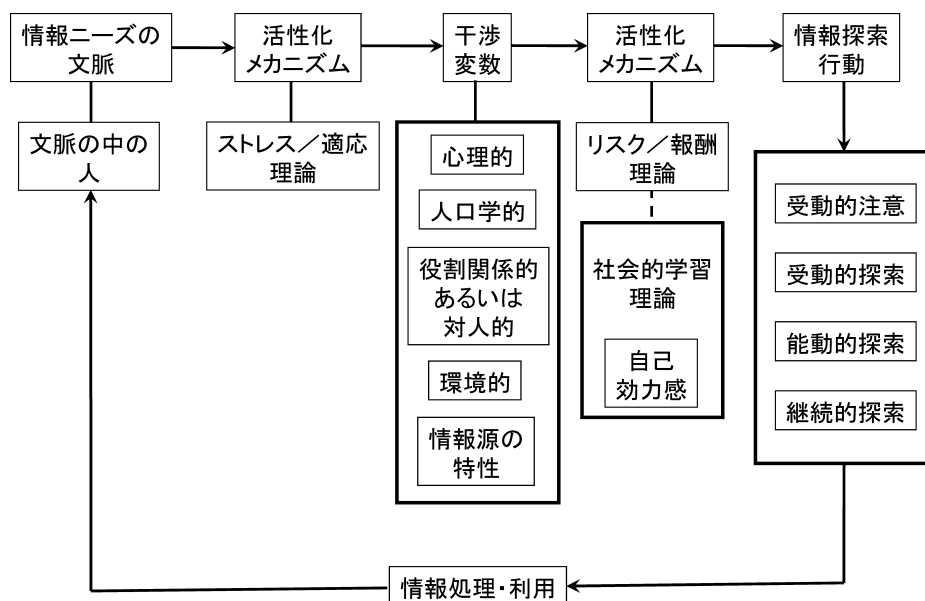
もっぱら関心を当てている一方で、意味構築の共同的な側面にあまり配慮していないという問題意識^{3,4)}があったと考えられる。社会的視点の研究関心に沿った研究の拡大は、この問題意識と結びついたものとみてよいだろう。

そうとはいえ、社会的視点といわれる研究関心が広く認識されるようになってから、まだ十余年にすぎない。認知的視点による研究についての整理・検討は、この視点による研究が早くから盛んに行われたこともあって、比較的多く行われてきた。その代表例としてしばしば参照されるものに、Pettigrewらの論文にも名の挙がっているWilsonによる研究が挙げられるだろう。彼は、この研究において、既往研究で提示されている知見を統合して、情報行動モデルを提示した(第1図)。Wilsonの情報行動モデルには、「情報行動」をさまざまな情報探索・利用を含む最も広範な概念として、その内部に「情報探索行動」と「情報検索行動(コンピュータを用いた、蓄積情報の探索)」があるものとして説明する理解が示されている。また、このモデルの直接の背景となっている別のモデルは、情報探索プロセスを基盤にして情報行動を説明している(第2図)⁵⁾。

一方で、社会的視点による研究の全般を見渡すような研究はまだ提示されていない。先に述べたような社会的視点の焦点は、概念レベルでは、ある程度共有されていると考えられる。しかし、実際の研究のなされ方は多様であり、これまでの研



第1図 Wilsonの情報行動モデル(1)⁵⁾
注: 和訳は筆者による



第2図 Wilson の情報行動モデル (2)³⁾

注：和訳は筆者による

究の中で提示された論点の整理は、徐々に始まったばかりの段階だと考える。幾度か引用してきた Pettigrew らの論文は、その数少ない例の一つである。したがって、社会的視点による研究群の整理・検討を行う余地はまだ大いに残されているといえよう。

本研究は、広い意味では、社会的視点による研究の論点整理の進展に寄与しようとするものである。それに向けて、Chatman による一連の研究に焦点を当てた検討を行いたい。その理由は、彼女の研究の射程をより発展的に検討することで、社会的視点の研究関心に沿って情報探索・利用を今後どのように検討しようかということや研究方法論についての重要な示唆が得られると考えられるからである。Chatman が社会的視点の中心的研究者の一人として位置づけられ²⁾、たびたび参照・言及の対象となってきたにもかかわらず、これらの示唆を得ようとする研究は、社会的視点による研究の論点整理が発展途上にあることと相まって、既往研究の中では十分に行われてきていない。社会的視点の問題関心に沿った研究、

フィールドワークを活用する研究が増加傾向にある現在、これらの示唆は今後の研究プログラムの計画に資するところが大きいと考える。そして、この示唆は、彼女の提示した理論が指示する内容と理論の提示に至るまでの彼女の研究視点を併せて考えることで、十分な形で見いだされるものと考えられる。理論の提示に至るまでの彼女の研究視点には、理論に回収されていない論点があるためである。

さらに、上記の研究を計画する際、検討者は、Chatman の研究の詳細な整理から始める必要がある。なぜなら、彼女の理論の形成過程、彼女の理論の両面について、それらを詳細に跡づけた研究はこれまで提示されていないためである。次節で検討課題の形で詳述するように、既往研究は彼女の研究の展開を論者ごとにそれぞれ断片的に扱うにとどまっている。同時に、彼女自身も、自らの研究の発展を十分に明確な形で整理・提示しているとはいえない。そのため、彼女の研究の全体を扱う整理・検討、つまり通史的検討が必要とされることとなる。この整理・検討は、上に述べた

とおり Chatman の研究からの示唆を得ようとする際の考慮材料として必要とされるし、また、それ自体、社会的視点の論点整理に寄与するものである。

以上の理由から、本研究では、Chatman の研究視点が情報利用研究に持つ意義を明らかにすることを目的とする。次節では、その達成に向けた検討課題を、彼女の研究と彼女の研究を参照する既往研究を概観する中で、より具体的に示すこととする。

B. 検討課題と検討枠組み

1. Chatman をめぐる既往研究

検討課題を明確にするために、本項では、彼女をめぐる既往研究を概観する。

Chatman の研究がどのように進展したかということの概要は、彼女自身が 2001 年の ISIC (Information Seeking in Context; 情報利用研究の国際会議の一つ) で行った基調講演⁶⁾や、彼女が「情報貧困の理論」を提示した論文⁷⁾から知ることができる。

ISIC 基調講演と情報貧困の理論論文では、彼女の研究の次の特徴が述べられている。彼女は、情報貧困とそれまで研究されてこなかった貧困者の情報探索・利用の実態を研究の主題として研究を開始した。この主題を追究するため、数回のフィールドワークを行い、データをいくつかの既存の理論を用いて分析した。しかし、その分析を通じて最終的にみえてきたアノマリー (anomaly; 枠組みに当てはまらない現象) は、分析に利用した理論やその他多くの既往研究の成果からはみ出すような、情報貧困や貧困者の情報探索・利用の局面を示していた。そのため、新たに情報貧困現象を詳細に説明する理論を提示した。そして、それを皮切りに、自ら、いくつかの情報探索・利用を説明する理論を提示した^{6),7)}。おおむね、このように要約できよう。

また、情報貧困の理論論文では、この理論の説明する「情報貧困」と自身の先行調査の成果がいかに関係するか、ということが議論されている⁷⁾。

理論を提示するまでの研究については、この論文での記述のほうが詳細である。

第三者による既往研究でも、Chatman がさまざまな角度から検討されている。まず、理論を中心とした、Chatman の研究の内容紹介が行われている。A 節に述べたように、Pettigrew らの論文は、彼女が社会的視点の先駆者であると位置づけた後、情報探索・利用をテーマとする三つの理論の内容を個々に概観している²⁾。最近編まれた情報利用研究の理論のアンソロジー集である『情報行動の理論』では、複数の章で Chatman の理論の紹介がそれぞれなされている^{8),9)}。また、情報利用研究の理論的展開⁴⁾、および、デジタル・デバインド論の整理¹⁰⁾の一環として言及したものに、田村による研究がある。

次に、文脈のとらえ方という観点から Chatman の研究を取り上げた研究がある。Christina Courtright による情報利用研究における文脈観をめぐる展望論文は、情報利用研究者の文脈理解を「客観的文脈 (Context as “Container”)」「個人の内部で構築される文脈 (Context as Constructed Meaning)」「社会的に構築された文脈 (Socially Constructed Context)」「関係論的文脈 (Relational Context)」「変化する文脈 (Changing Context)」の五つに類型化する。そして、Chatman は「社会的に構築された文脈」という文脈観をとる研究者の一人だと位置づけている¹¹⁾。

Chatman の研究方法論の局面では、上記諸研究の他、Marcia J. Bates も、エスノグラフィーの研究の代表例として Chatman を挙げている¹²⁾。また、Donald O. Case は、Chatman が情報利用研究への社会理論の適用を推進し、続いて、情報利用研究にも固有の理論が必要であるとの考えから彼女自身も理論を提示した、と論じている¹³⁾。

Chatman による理論の適用の例として最も目立つのは、米国情報学・技術協会 (ASIS & T) の 2006 年年次大会における「Chatman への接近」と題されたパネルにおいて、4 人のパネリストが、Chatman の理論を用いて発表した研究であろう¹⁴⁾。また、Paul Solomon は、Chatman の提示した概念装置を再解釈のうえ、利用している¹⁵⁾。

2. 本研究の検討課題

前項で概観した既往研究の中では、検討が十分に及んでいない点がある。そこで、本研究は、以下の点を検討課題とする。

なお、Chatman の研究を、「理論形成期」と「理論提示期」に区分して検討を進める。なぜなら、このように時期を分けて別に考察することで、彼女の研究の意義をより明確に理解できると考えるためである。理論形成期とは、彼女が既存の理論を適用しながら研究を進めた時期であり、後から見て提示された理論の形成の過程とみなせる時期のことである。理論提示期とは、彼女自身が理論を提示した時期のことである。

a. 検討課題1: 理論形成期の研究の論点整理

既往研究の不足点の一つは、多くの既往研究が、Chatman の提示した理論自体の考察に集中する一方で、理論形成期の諸研究をあまり検討していないということである。

理論の適用・検証が、それ自体重要な課題であることは疑いない。一方で、理論形成期の一連の経験的研究が十分に検討されていないことから、彼女の研究のいくつかの局面にまだ光が当てられていないままとまっている。その局面とは、Chatman の研究の出発点と過去の図書館・情報学の関係、そして、理論提示期に示される新たな情報探索・利用理解の形成につながる発見とそこに至る彼女の研究プロセスである。彼女が提示した理論は、理論形成期の研究内容を反映しているため、理論形成期の諸研究の詳細な理解を背景としてこそ、十全に理解できるはずである。

これらの論点を明らかにするためには、理論形成期の個々の研究にさかのぼった詳細な検討が必要となる。したがって、「理論形成期の研究の論点整理」を一つ目の検討課題とする。

b. 検討課題2: 提示された理論の統合的解釈

既往研究の第二の不足点は、Chatman の理論を統合的に整理・解釈した研究がないということである。

彼女が情報探索・利用をテーマとして提示した理論には、時系列順に示せば、これまでに出てきた情報貧困の理論のほかに、「囲われた生活

(a life in the round) の理論」「規範的行動の理論」がある。筆者がみるところ、Chatman は、三つの理論の提示を通じて、彼女流の情報探索・利用理解を詳細に示している。同時に、その中で、彼女の情報探索・利用理解が発展していく。そのため、既往研究にみられるように個々の理論の内容を独立に理解しようとするよりも、むしろ、三つの理論の内容を見渡し、統合的に解釈することで、彼女の情報探索・利用理解の詳細な理解がもたらされると考える。

以上の理由から、「提示された理論の統合的解釈」を、二つ目の検討課題とする。

c. 検討課題3: Chatman の研究視点の展開の方向性の考察

検討課題2までで行う検討を元にした「Chatman の研究視点の展開の方向性の考察」を、三つ目の検討課題としたい。

理論形成期の研究の中にみられる Chatman の研究視点が、提示された理論にすべて反映されているわけではない。理論形成期の研究での知見と、理論提示期での研究の知見を併せて考えることにより初めて、情報利用研究の今後に資する示唆が十分に得られると考える。

d. 特に参考とする既往研究

Chatman の研究に対する既往研究の大部分が、彼女の理論をめぐるものに集中していることは、先に述べたとおりである。ただし、筆者が本研究で取り組もうとしている上記三つの研究課題にかかわる検討がこれまで全く行われてこなかったかといえ、そうではない。これらを、特に参考とする既往研究として、改めて示す。

まず、先に触れたように、Chatman 自身が自らの研究の振り返りを行っている。情報貧困の理論論文では、この理論が彼女のそれまでの研究とどのように関係しているかということが、ある程度議論されている⁶⁾。この論文では、彼女の研究の発展の中で鍵となってくる理論のアノマリーなど、かなり興味深い主題が扱われている。一方、同論文の目的は情報貧困の理論の妥当性の論証にあてられ、経験的成果はそれとの引き合いで検討されている。その帰結として、彼女がどのように

して情報貧困の理論に到達したのかということ、つまり経験的研究のプロセスと同理論の提示との関係が追いつらなくなっている。また、彼女の理論の基礎となっている情報探索・利用のとらえ方と他の情報利用研究との差異についても、検討の余地が残されている。

もう一つは、ISIC 基調講演である。この講演では、理論形成期の研究概要が前半で、彼女の理論の内容が後半で、それぞれ議論されている⁷⁾。この講演からは、先に示したように、彼女の研究の大枠を把握することができる。しかし、恐らく講演という形式的制約が大きいのか、論述から落ちている論点も多い。最も大きな点は、情報貧困の理論の提示直前に行われた研究についての記述が丸々省略されていることである。また、後半では、提示された三つの理論が確かに時系列順に示されているのだが、三つの理論の提示により全体として何を論じたかったのかということが体系的に表現されるには至っていない。

Chatman 以外の研究では、特に田村の研究¹⁰⁾が、情報利用研究の理論的展開における彼女の位置づけや、彼女の方法論上の特徴などについての議論を行っているという点で、注目される。同研究は、筆者の見解に通じる多くの示唆を含んでいる。しかし、取り上げた研究の範囲が限定的であることと、研究自体の主眼が Chatman に置かれていないことにより、彼女の研究についてより詳細に検討を展開する余地は残される結果となっている。

以上に挙げた既往研究は、それぞれの研究について示した理由で、部分的な検討にとどまっている。しかし、各論文が扱う範囲において、本研究にとって有用な示唆も含んでいる。そのため、本研究では、Chatman や田村の研究を中心とした既往研究の成果をところどころで参照し、取り込みながら、より本格的な整理・検討を進める。

3. 検討の枠組み

次章以降では、上に述べてきた三つの検討課題に順に取り組んで行く。それに先立って、本章の最後に、本研究で彼女の研究をどのように区分し

て検討していくか、ということを変更して示すこととする。

Chatman は、理論を提示するまでの自らの研究を、フィールドワーク対象によって、CETA 研究、用務員研究、Garden Tower 研究の三つに区分している。その区分に従って論文をリスト化したものが、第 1 表である。

しかし、単に時系列・フィールドワーク対象によって区分するのみでは、彼女がどのように研究を進展させたかということ、つまり、時期による彼女の検討の特徴がみえない。そこで、本研究では、彼女の研究の論理的展開をより明快に整理して示す意図の下、上記の呼称は引き継ぎつつも、Chatman が行った研究の内容と照らし合わせた新たな時期区分により、彼女の研究を検討する。第 1 表内の論文番号を利用して、時期と論文の対応関係を示すと、第 2 表ようになる。なお、上記論文番号は、次章以降の議論の中でも使用する。

II～IV 章では、理論形成期第 1 期～第 3 期の諸研究を順に扱いながら、一つ目の検討課題についての検討を進める。具体的には、研究目的・研究対象・研究方法論、各時期の特筆すべき点、各時期の議論のまとめの 3 点から整理を行う。各時期の議論のまとめは、なぜ各時期を上にした名称で呼ぶのか、そして各時期の情報世界 (information-world) はどのようなものか、ということの 2 点の検討を通じて行う。Chatman が情報探索・利用と社会の関係をどのような諸要素の連関によってとらえていたかということを表すものとして、「情報世界」という概念を用いる。

V 章では、理論提示期の諸研究を検討する。ここでは、個々の理論の内容を詳細に検討した後に、三つの理論の統合的解釈を行う。このことにより、理論提示期の Chatman の情報世界を明らかにする。続いて、彼女の情報探索・利用理解の独自性を、既往研究を参照しながら、明らかにする。

VI 章では、三つ目の研究課題である、Chatman の提示した研究視点の展開の方向性について議論する。

第1表 本研究の主たる検討対象となる Chatman の論文のリスト

フィールド研究名・理論名	論文番号	論文名	出版年
CETA 研究	①	「ワーキングプア間の情報の普及」 ¹⁶⁾ (博士論文)	1983
	②	「フィールド研究：方法論的テーマ」 ¹⁷⁾	1984
	③	「情報， マスメディア利用， ワーキングプア」 ¹⁸⁾	1985
	④	「普及理論の適用：情報普及についての概念的モデルのレビューと検証」 ¹⁹⁾	1986
	⑤	「オピニオンリーダーシップ， 貧困， 情報共有」 ²⁰⁾	1987
用務員研究	①	「単純労働者の情報世界」 ²¹⁾	1987
	②	「疎外理論：用務員間の情報についての研究に対する概念枠組みの適用」 ²²⁾	1990
	③	「小さな世界の中での生活：情報探索行動に対する即時的満足の理論の適用可能性」 ²³⁾	1991
Garden Tower 研究	①	「外部の社会的世界への経路：外部社会と連絡を取り合う老人女性」 ²⁴⁾	1991
	②	「老後を過ごす女性たちの情報世界」 ²⁵⁾	1992
情報貧困の理論		「アウトサイダーの活気のない情報世界」 ⁷⁾	1996
囲われた生活の理論		「囲われた生活の理論」 ²⁶⁾	1999
規範的行動の理論	①	「理論と調査の中に社会生活を枠づけること」 ^{6),27)} (ISIC 基調講演)	2000
	②	「小さな世界：バーチャルコミュニティとフェミニズムに関わる書籍販売における規範的行動」 ²⁸⁾	2001

第2表 本研究で行う時期区分と各時期に含まれる論文

理論形成過程からみた時期区分	研究内容	各時期に含まれる論文
理論形成期第1期	情報普及の観点からの検討による情報貧困， 貧困者の情報探索・利用の再発見（期）	CETA 研究①～⑤， 用務員研究①
理論形成期第2期	貧困者の情報世界の分析の深化（期）	用務員研究②③
理論形成期第3期	情報貧困， 貧困者の情報探索・利用のとらえ方の転換につながる発見（期）	Garden Tower 研究①②
理論提示期		情報貧困の理論， 囲われた生活の理論， 規範的行動の理論①②

VII 章では，結論として，Chatman の研究視点が情報利用研究に持つ意義を論じる。そして，今後の研究課題を論じる。

なお，上記論文リストは彼女の論文の大部分を含んでいるものの，網羅的なものではない。これは，本研究の目的と照らし合わせて，詳細に検討する研究を選択したことによる。本研究に含まれていない研究については，VII 章で触れる。

II. 情報普及の観点からの検討による情報貧困， 貧困者の情報探索・利用の再発見期

理論形成期第1期の，情報普及の観点からの検討による情報貧困， 貧困者の情報探索・利用の再発見期には，CETA 研究①～⑤^{16)～20)}，そして用務員研究①²¹⁾の，合計6本の論文が含まれる。なお，CETA 研究②～⑤は，彼女の博士論文である CETA 研究①に基づいて提示されたものである。

A. 研究目的・研究対象・研究方法論

1. CETA 研究

a. 研究目的・研究対象

後年の Chatman の論述によれば、彼女の研究の主題は当初から情報貧困にあった (I 章にて既述)。この概念は、情報を入手することに困難を抱えている人々を指すものと理解できる。並んで、過去の研究でほとんど扱われていなかった貧困者 (poor) の情報探索・利用も主題とされている。

筆者がみるところ、この貧困者という概念はたいへん広くとらえられており、何らかの意味で社会の中で不利な・周辺的な立場に立たされている (マージナルな) 者全般を指しているようである。時に応じて、経済的貧困、疎外など、さまざまな形のマージナル性が扱われる。多様な人口集団をこの一つ概念でとらえうのかという疑問はあるが、実際に彼女自身が上記のような広い理解に基づいて研究を進めていくため、本研究ではこの点について深く立ち入らないこととする。研究対象が移されるたびに、用語法についてその都度説明を行う。

彼女の研究の始点は、CETA 研究である。この研究の焦点は、あるワーキングプアの社会的環境の内部での情報の普及の検討にある。より具体的には、都市部のワーキングプアの生活環境を分析するうえでの普及理論の検証、そして、その環境の中にオピニオンリーダーが存在するか否かを確かめること、が研究目的として挙げられている¹⁶⁾ [p. 1]。情報貧困、貧困者の情報探索・利用の研究を行ううえで、Chatman が経済的貧困者を対象として選んだのは、情報貧困を経済的貧困と結びつけていた当時までの研究からの影響を受けてのことである⁷⁾ [p. 194]。

Chatman は、経済的貧困者のマスメディア利用についての既往研究の知見を次のようにまとめている。既往研究の中で、経済的貧困者は、低い社会的階層にいることから、新聞や雑誌などの印刷物を読むような教育程度を備えておらず、即時的満足を求めて娯楽のテレビ番組を多く消費す

るとみなされている。そして、このことの帰結として、経済的貧困者は情報について貧困な状態にあるとみなされている¹⁶⁾ [p. 86-88]。言い換えれば、彼女は、次のように情報貧困についての既往研究を整理している。経済的貧困のため、経済的貧困者は教育を受けられない。教育を受けられないため、経済的貧困者は、利用にあたってある程度の教育が必要とされる新聞などの有用な情報を含むメディアを利用できず、娯楽のテレビ番組ばかり見ている。よって、有用な情報を手に入れない情報貧困の状態にある。つまり、経済的貧困性が、情報貧困の核たる要因だとみなされている。

しかし、彼女は、自身の公共図書館での勤務経験を通じて、経済的貧困者による情報探索・利用は、上記の知見とは異なりそうだとすることを、経験的に知っていた。また、既往研究では、経済的貧困者の社会的環境における情報探索・利用、つまり日常的情報の普及やマスメディア利用についての経験的研究が非常に少なかった¹⁶⁾ [p. 1-3]。「日常的情報」とは、人々が、日常生活の関心事に対処するために探索・利用する情報と理解することができる。これらのことから、彼女は、経済的貧困者の生活の実際をより詳細に明らかにするため、自身で経験的研究に取り組むこととなる。なお、彼女の指摘する既往研究の欠乏は、情報の普及やマスメディア利用についての既往研究の多くが、科学者や技術者を対象としたものであったことから、結果的に生じていたものと考えられる。

具体的な対象となったのは、CETA である。CETA とは、米国で 1973～1982 年にかけて施行されていた総合雇用訓練法 (The Comprehensive Employment and Training Act) である。この法に沿って、州や地区が主体となって CETA プログラムを運営した。法・プログラムの主眼は、経済的貧困者や失業者等に対する、職業訓練・雇用紹介である¹⁶⁾ [p. 7-33]。

原ひろみが米国の職業訓練の政策評価について論じた報告書²⁹⁾には、CETA プログラムの内容について、Chatman による記述内容と整合し、

かつ簡潔・明快なまとめが提示されている。原によれば、CETA プログラムでは、「教室型職業訓練（座学）」「民間企業へ委託する職場内訓練（OJT）」「民間の職業訓練機関への幹旋」「公共セクターでの短期就業経験」の四つの職業訓練が行われていた³⁰⁾。

ごく簡単にまとめれば、CETA プログラムの対象となる人々は、非正規労働者の身分で、教育を受け、労働する人々、ということになる。

CETA の中でも、カリフォルニア州のパークリー市の CETA 労働者が、Chatman による CETA 研究の対象者となった。さらに、より社会的に不利な立場に置かれていると想定される人々を選択するため、女性労働者が対象とされた。CETA 研究では経済的貧困性に焦点が当たっていることを先に述べたが、ここには、彼女のマージナル性への志向が見て取れる。

b. 研究方法論

研究目的にすでに表れているように、この研究では、普及理論とオピニオンリーダーシップ論が適用されている。これらの適用の背景については B 節で改めて分析することとするが、ここでは、それに先立って、普及理論とオピニオンリーダーシップ論の概要を述べる。

普及理論とオピニオンリーダーシップ論は、コミュニケーション研究の中で提示されたものである。普及理論は、その名のとおり、物や技術、意見などの普及を説明しようとするものであり、コミュニケーションの二段階の流れモデルを、多段階での普及を扱う形に発展させたものである³¹⁾。普及理論は普及プロセスを 4 要素により説明する。その 4 要素とは、「イノベーション」「ある個人から他の個人への、イノベーションの伝達」「イノベーションが伝達される社会的構造」「イノベーションが伝達される一定の期間」である¹⁶⁾ [p. 58-61]。イノベーションとは、ある社会的環境のメンバーによって新しいと認識され、採用される、物やアイデア実践である¹⁶⁾ [p. 58]。普及プロセスはこれらの要素によって形づくられているとされる。また、各要素はより細かい属性によって形づくられているとされる。

オピニオンリーダーシップ論は、普及理論に関係して提示された。この概念枠組みは、オピニオンリーダー、すなわち“集団の外部の世界、すなわち集団を取り巻く社会と集団とをつなぎ、また集団内でのパーソナル・コミュニケーションにおいて、中心的役割を果たす人物”³¹⁾ [p. 107] についてのものである。

Chatman 自身は、普及理論とオピニオンリーダーシップ論について非常に詳細なレビューを行っている。本研究では、これらの理論または概念枠組みのより具体的内容について、B 節以下に行う Chatman の議論の検討の中でその都度、理解に必要な範囲で言及することとする。

Chatman は、日常的情報の伝達はアイデアの普及とみなせることから、イノベーション普及の一種とみなせる、としている¹⁶⁾ [p. 80]。彼女は、普及理論とオピニオンリーダーシップ論が、上にまとめてきたように、対人コミュニケーション過程を扱うのに適した枠組みであることから、分析に際して適当な枠組みである、としている¹⁶⁾ [p. 3-4, 80]。

調査方法として、Chatman は、フィールドワーク（とその中でのインタビュー）を選択している。これは、日常的情報の伝達を扱うという研究の焦点と照らし合わせて、フィールドワークがその有り様を最も自然なセッティングの中で調査することができる、という理由による¹⁶⁾ [p. 5]。CETA 研究①の中では、自らの経験を交えながら、フィールドワークの進め方についての議論がなされている。たとえば、フィールドへのエントリーや、フィールドのメンバーと研究者の互恵的関係の形成、といったことが論じられている¹⁶⁾ [p. 104-144]。この議論をさらに発展・整理したものが、CETA 研究②である。

2. 用務員研究①

用務員研究の目的は、“大学内部の単純 (low-skilled) 労働者の情報・社会的世界を検討すること”²¹⁾ [p. 265] である。

研究対象は、当時 Chatman が勤務していた、ノースカロライナ大学の用務員である。方法論

的側面について、この研究の理論的背景となっているのはCETA研究で適用された普及理論であり、調査手法はフィールドワークである。

Chatmanが研究対象を移した理由は、研究の発展と密接にかかわっている。このことは、CETA研究の成果と併せて見た方が理解しやすいため、次節の中で述べていくこととする。

次節では、この時期のChatmanによる一連の研究で提示されている論点を明らかにする。

B. 特筆すべき点

1. 公共図書館利用者調査とChatmanの研究の関係

パラダイム・シフト以降の情報利用研究の多くが認知的視点をとった、ということは前章で述べたとおりである。他方で、Chatmanの研究には、次に述べていくように、パラダイム・シフト以前に行われていた公共図書館利用者調査や、公共図書館における案内・紹介サービスの立案のための日常的情報についての研究からの影響が、色濃く表れている。

公共図書館利用者調査、案内・紹介サービス、そして日常的情報についての情報利用研究の三者の関係は、すでに田村が、以下のように詳しく論じている。

Bernard Berelsonによる研究などの、1900年代中盤以降に行われた一連の公共図書館調査の中では、コミュニケーションの二段階の流れモデルとある意味で共通する知見が提出された。その知見とは、現実の公共図書館の利用者は、各地域コミュニティのすべての人々というよりも、むしろオピニオンリーダー的存在の人々に限定されていることから、この人々に向けたサービスを提供する方が、結局は地域社会における公共図書館の存在意義を主張できることとなる、というものである。この成果は、公共図書館の現実の利用者層と「すべての人にサービスを」という理念との間のジレンマを浮き彫りにしたもので、成果をめぐる論議を生むとともに、そのジレンマを埋めつつ利用者を拡大するための無数の試行錯誤につなが

ることとなった。その内の一つが、案内・紹介サービスである。案内・紹介サービスとは、保健衛生、求人・職業訓練などの日常生活上の問題を抱えた地域住民に対し、適切な行政機関・ボランティア団体・専門家などを紹介することによって、住民の問題解決を支援しようとするサービスである。このサービスを図書館が立案するために、貧者の情報利用や、人々の日常生活にかかわる情報利用に関する研究が行われるようになった。田村は、そのような研究を行った研究者に、Thomas Childers, Dervin, Chatmanを挙げている¹⁰⁾。

Chatmanが公共図書館利用者調査の影響下で考察を進めたということの直接的な証拠の一つは、博士論文の中のオピニオンリーダーについての議論を整理・発展する形で提示された、CETA研究⑤にある。同論文中的、「オピニオンリーダーと図書館」という一節には、Berelsonらを参照する形で、公共図書館界内の論議についての言及がある。また、結論部では、後に述べるCETA研究の経験的成果をもとに、公共図書館の非伝統的な利用者を取り込むためには、任意の社会集団のオピニオンリーダーを対象とした案内・紹介サービスの展開が有用である、との議論が行われている²⁰⁾。

また、彼女がコミュニケーション研究の枠組み、とりわけ普及理論を適用したことも、上記の調査が背景となつてのことであろう。先に述べたように、普及理論とは、コミュニケーションの二段階の流れモデルに表現される普及過程よりも、より複雑な多段階の普及過程を扱うべく考案されたものであった。そして、公共図書館のサービス拡充のための日常生活における情報利用の調査の背景には、コミュニケーションの二段階の流れモデルと共通するような知見があった。このことをみれば、Chatmanが、情報貧困、貧困者の情報探索・利用の研究に際して普及理論の適用を考えたのは、たいへん自然な発想であったと考えられる。なぜなら、普及理論の適用は、コミュニケーション研究の発展と軌を一にし、過去の公共図書館利用者調査の発展としても位置づけられるた

めである。

加えて、Chatman 自身が公共図書館での勤務経験を持っており、とりわけ図書館拡充プログラム (library extension program) のディレクターを務めていた¹⁶⁾ [p. 1] という事実も、公共図書館利用者調査周辺の議論と彼女による研究の関係の傍証となる。

以上をみると、Chatman による一連の情報利用研究は、認知的視点をとる研究と時期的には並行して発展していったとはいえ、パラダイム・シフト以前に行われていた公共図書館利用者調査や日常の情報についての研究を継承した研究だと理解することができる。

前章でまとめたように、これまでの研究には、Chatman による社会科学の他分野の理論・フィールドワークの導入を取り上げて、彼女の先駆性を論じるものが多い^{2),12)~14)}。確かに、それまでの情報利用研究で適用例がなかった他分野の理論を利用したということ自体は、彼女の研究の新規性である。他方、そのことが同時に、過去の情報利用研究の継承としても理解できるという一面は、これまで指摘されることがなかった。

彼女による他分野の理論の導入は、単に情報利用研究における理論的基盤を補完するべくなされた、というよりも、上記のような過去の研究との関係との下になされた、と理解するほうがより正確であろう。このことは、情報利用研究の理論的展開の中での彼女の研究の位置づけを考えるうえで、今後注意が払われるべき部分だと考える。

2. フィールドワーク

すでにたびたび指摘されてきているように、彼女は一貫してフィールドワークを研究方法論の軸に据えており、情報利用研究におけるフィールドワークの活用の先駆者である。博士論文¹⁶⁾や CETA 研究②¹⁷⁾からは、彼女が、フィールドワークの実践に先立って、かなり詳細に「調査手法としてのフィールドワーク」について理解しようとしたことが見て取れる。CETA 研究において彼女がレビューしているフィールドワークについての文献には、現在、フィールドワークの方法・技

法についての代表書とされている文献が含まれている³²⁾し、彼女の論文^{16),17)}には、それらの文献で述べられていることが見通しのよい形で、かつ発展的な形で整理されている。この時期のレビューが、その後の彼女の研究におけるフィールドワークの土台となっていたことは疑いない。

3. CETA 研究での記述・分析

A 節に述べた研究枠組みとの関連で行われた、CETA 研究におけるフィールドワークの記述・分析は、多岐にわたる¹⁶⁾ [p. 145-233]。ここでは、要点をみていく。

a. オピニオンリーダーと雇用情報

フィールドワークの中で行ったインタビューをもとに、CETA 労働者の中でオピニオンリーダーと見ることができる人々を同定した。そして、労働者たちが、オピニオンリーダーたる特性を有しているか、ということを検討した。結果として、オピニオンリーダーの特性とされる 6 点のうち、「マスメディアへの接触」「社会的参加」「社交性」「コスモポリタン性」の 4 点が支持された。つまり、オピニオンリーダーと認められる労働者たちは、ほかの研究対象者たちよりもマスメディアを利用しており、ボランティア活動等の社会的活動を行っており、社交性を備えており、自らのいる社会の外部にも多大な関心を持ち、自分もその不可欠な一部であるとしてとらえていた。このような研究対象者の存在から、労働者たちの社会的環境には、オピニオンリーダーは存在する、とひとまず判断できる³³⁾。

ただし、CETA でのオピニオンリーダーは、オピニオンリーダー論に想定されるオピニオンリーダーと異なるところもあった。それは、彼女たちは、正規雇用や雇用を得るための方法などにかかわる「雇用情報 (job information)」を、CETA 労働者の間に普及していない、ということである。このことは、もちろん、オピニオンリーダーでない労働者についても、共通していた。その理由が、普及理論に説明されるイノベーション普及の際の意思決定に関係する属性を用いて説明される。

CETA 労働者は、非正規労働者であり、求職状態にある。そして、正規の職を得るための職業訓練を兼ねて労働している。そのため、雇用情報を探しており、互いに競合し合う関係にある。このような関係の下では、雇用情報を他者に渡すことは、自らの雇用の機会をみすみす失うことに直結しかねない。これは、イノベーション普及の際の5属性のうち、「相対的優位性」という属性に対応する。つまり、情報を他者に伝えない状態のほうが、伝えた場合と比較してよい状態なのである。したがって、CETA 労働者は、家族やごく親しい知人を除いて、雇用情報を普及しないことを選択する。

b. イノベーション普及の際の意思決定の属性

Chatman は、普及理論に説明されるイノベーション普及の際の意思決定に関係する5属性のうち、上記「相対的優位性」と、他の三つの属性、計四つの属性が支持されたとしている。一つには、「整合性（イノベーションが、人々の既存の価値、実践、ニーズと一貫している度合）」が支持された。上に見たのは、情報が普及されないことだったが、普及される情報もある。例として挙げられているのはCETA 委員会とCETA 労働組合の関係についての噂が急速に広まった事例で、この噂が広まったのは、CETA 労働者の現実と照らし合わせてその噂が受容可能であるためであった。また、「複雑性（イノベーションが、利用あるいは理解するのに難しいと知覚される度合）」が支持された。これについては、CETA 委員会から示されたトレーニングプログラムについての情報が、いくつかの側面で労働者たちにとって複雑あるいは曖昧すぎて受容されていなかった、という例が挙げられている。ならびに、「試験可能性（イノベーションが、実験的に利用できる度合）」が支持された。これについては、労働者たちが、ある雇用情報が雇用につながりそうだとひとまず心の中で判断したら、その使用可能性を、情報元の信頼性や情報の新しさといった点からさらに確かめていた、という例が示されている。

c. 普及プロセスの時間的側面

普及理論によれば、普及プロセスの要素の一つに、「一定の期間」がある。CETA 環境での雇用情報については、この「期間」の持つ意味合いが、一般的社会（中産階層の人々が生活する社会）とかなり異なることが明らかになった。それは、雇用情報の価値と関係している。

通常の普及では、ある事物が普及されればされるほど、その事物の価値は高まる。言い換えれば、一般化し、よく用いられているものとなる。しかし、雇用情報は、それが新しければ新しいほど価値が高い。競合者が少ないうちのほうが、そこに提示されている雇用機会をより高い可能性で享受できるためである。そのため、CETA 環境における雇用情報普及の「期間」は、情報を入手する時点・タイミングの重要性を指し示すことになる。つまり、一般的社会での（あるいは一般的な）情報の普及と、CETA 環境の情報の普及においては、期間（時間）のとらえられ方が大きく異なるのである。

d. マスメディア利用

フィールドワークの中でのインタビューを通じて、CETA 労働者のマスメディア利用の実態は、既往研究で論じられているものと異なる、ということも明らかになった。CETA 労働者たちは、経済的に貧困だが、その教育程度は必ずしも低くはなかった。また、公共放送サービス (Public Broadcasting Service; PBS) の番組や、専門的な雑誌を多く消費していた。ただし、公共図書館は、労働者たちの日常生活で有用とされる情報の情報源とはみられていなかった。

CETA 研究での記述・分析の概要は以上のとおりである。なお、CETA 研究での分析は、先にみた普及理論に説明される普及プロセスの4要素のうち、「社会的構造」以外の3要素に集中している。社会的構造要素についても言及がないわけではないのだが、他の要素と比して、そこまで詳細に議論が行われているようにはみえない。

4. 成果としてのアノマリー：CETA 研究のまとめ

Chatman は、CETA 研究の結論¹⁶⁾ [p. 234-249] として、上に述べた調査結果を反映させれば、普及理論とオピニオンリーダーシップ論が、多くの部分で CETA 労働者の実態に適合する形に修正可能だと述べる。他方、既往研究と異なる知見、すなわちアノマリーも得られた、とも論じる。

Chatman は、普及理論にかかわって、次のように述べている。“普及論者は、イノベーションは、社会的環境の中を自動的流行によって普及する、と仮定する。本研究の発見は、しかし、この仮定を支持していない”¹⁶⁾ [p. 244]。また、オピニオンリーダーシップ論にかかわっても、“オピニオンリーダーが、他者にとって新たな情報の情報源であるという、先行研究における発見は支持されなかった”¹⁶⁾ [p. 241] と述べている。いずれも、雇用情報が普及されないという研究成果を踏まえての考察であろう。情報は普及されないこともある。雇用情報が普及されないのだから、CETA 労働者たちは、雇用情報について情報貧困者である。これは、普及理論・オピニオンリーダーシップ論に対するアノマリーとして見いだされている。

また、上記研究成果を踏まえて、経済的貧困者のマスメディア利用についても、研究対象がパークリー市という比較的教育程度の高い都市の労働者だという点で留保をしながらも、“この研究の結果は、貧困者の情報世界にかかわる先行研究の一般的妥当性に対する疑問を提示するものである”¹⁶⁾ [p. 244] と述べている。つまり、経済的に貧困だからといって、教育程度が低いわけではなく、利用にあたって高度な教育程度を必要とされるとみなされる印刷物が必ずしも消費されていないわけではない。既往研究では、経済的貧困性が情報貧困の核たる要因とされていたが、上記の結果からは、経済的に貧困だからといって、即、情報について貧困な状態にあるとはいえないということ、情報貧困にはほかにもいろいろな要因があることが示唆される。これは、マスメディア利用研究に対するアノマリーとして見いだされている。

る。

つまり、CETA 研究の成果は、「情報が普及されないことがあり、このことがある種の情報についての情報貧困につながっているということの発見」、そして、「経済的貧困性を情報貧困の唯一の要因として考えるわけにはいかず、ほかにもさまざまな要因がありうるということの発見」の二点にまとめられる。また、情報が普及されないことにつながる要因として、情報の種類が挙げられている。たとえば、雇用情報は、普及されない情報である、ということである。

Chatman は、以降の研究で、普及理論とオピニオンリーダーシップ論の実際の修正は行っていない。むしろ、理論または既往研究に対するアノマリーとして見いだされた上記の現象を出発点として、情報貧困と貧困者の情報探索・利用についての検討が以降の研究の中で粘り強く展開されることになる。

また、調査の結果を受けて、公共図書館は今後、案内・紹介サービスを展開すべきである、との提言も行われている。

次に、用務員研究①においてどのような分析がなされたか、ということ論じたい。

5. 情報普及の観点からの分析の深化：用務員研究①

a. 用務員研究①においてなぜ研究対象が移されたか

CETA 研究の後、Chatman は、当時の勤務校であるノースキャロライナ大学の用務員に、研究対象を移すこととなる。後年、彼女は、より安定した環境で、CETA 研究で見いだされた「情報が普及されない」という現象について研究しなかった⁶⁾⁷⁾、と述べている。

情報が普及されないという現象について研究したい、ということは、CETA 研究の成果と対応している。情報貧困は情報が共有されないことと結びついていたためである。しかし、「安定した環境で」とはどのようなことなのだろうか。この点が、研究対象移行の理由の理解において、焦点になると考えられる。用務員研究①の冒頭部²¹⁾

[p. 265] ではほとんど説明が行われていない。しかし、用務員研究①の結論部には、研究対象の移行の理由が見て取れる一節がある。

社会的構造は、普及理論の主要な要素である。[普及理論における] 社会的構造の主要な機能とは、普及プロセスを説明することである。(中略) 理論発展の観点からみたこれらの発見 [用務員研究①での発見] の重要性とは、それらが情報の普及理論の適用可能性についてのより明確な理解につながることである。例えば、先行研究において、Chatman は、永続的な雇用を得る方法といった、いくつかの情報の特性が、普及プロセスを妨げているということを発見した。つまり、この種の情報は、普及させるにはあまりにも価値があるのである。[それに加えて、] 本研究においては、社会的構造が重要な障壁となることが明らかになった²¹⁾ [p. 278] (引用個所の [] 内は筆者加筆)。

引用箇所から、二つの論点がみえてくる。一つ目は、この研究が CETA 研究で適用された普及理論を背景としており、この観点から情報が普及されないことについて継続して検討を行ったものである、ということである。二つ目は、この研究が普及理論における普及プロセスの社会的構造要素に焦点を当てている、ということである。

普及理論における社会的構造要素は、「ある社会システムにおける、地位や立場の布置」を内容としている。Chatman の研究との関連では、「ある社会システム」とは組織体のことを指すものと解釈してよいだろう。そして、CETA 研究の対象者は、求職中の非正規労働者であり、正規労働者ではない。この環境では、組織体における地位や立場と、情報の普及の関係についての分析を深めることは難しい。一方、用務員研究での対象者は、正規労働者であり、大学という組織体に所属している。

つまり、用務員研究①での研究対象の移行の理由の一側面は、CETA 研究で十分に検討できな

かった組織体における地位や立場と情報普及の関係に焦点を当てるためだと理解してよいだろう。CETA 研究では、情報が普及されないことの要因として情報の種類が見いだされた。Chatman は、さらに分析を深化し、ほかの要因を明らかにしようとしたのだと考えられる。

並んで、もう一つ理由がある。CETA 研究の次の研究対象は、恐らく情報貧困、および情報が共有されないという現象が起こっていると予想される研究対象でなければならない。Chatman が用務員という研究対象を選んだことには、この意味もあるのだろう。研究対象が経済的貧困性、マージナル性と言う点で類似しているのだから、類似した現象が起こっている見込みも高い、というわけである。

用務員研究①で研究対象が移されたのは、以上の理由によると考えられる。続いて、用務員研究①においてどのような記述・分析が行われたか、ということに議論を進める。

b. 用務員の情報普及：用務員研究①における記述・分析・成果

用務員の環境でも、CETA の環境と同様に、情報が共有されないという現象が起こっていた。彼女は、このことにかかわって、次のように用務員研究①の成果を総括している²¹⁾ [p. 278-280]。

用務員たちは、掃除などのさまざまな単純労働に従事する。そして、業務にかかわるさまざまな情報ニーズを持っている。それらは、「安全」「利益」「同僚や管理者とのよりよい関係性の確立の方法」「大学コミュニティとのよりよい関係性の確立の方法」である。「安全」とは、たとえば、器具の取り扱い方などを指す。「利益」とは、たとえば、休暇などのことである。「同僚や管理者とのよりよい関係性の確立の方法」には、たとえば、業務上のアドバイスを得られたりする関係性をいかに確立するかといったことが含まれる。「大学コミュニティとのよりよい関係性の確立の方法」とは、たとえば、キャンパスで無節操にごみをまき散らす学生といった業務の障害になる人々の行為・行動を、いかに無難に改善してもらうかといったことである。

一方、大学用務員の間で上記ニーズにかかる情報はしばしば共有されていなかった。Chatman は、このことに、組織体の地位・立場が次のように関係している、と考察する。

まず、用務員は、分業体制の下、単純作業に従事している。業務は基本的に一人で行うべきものとされ、業務時間中の互いの会話は管理側から推奨されていない。そのため、そもそも情報を普及する機会が、休憩時間を除いて、圧倒的に少なくなっている。このことが、情報が普及されなくなる一つの要因である。

もう一つの要因は、用務員間の競合関係、そこからくる相互疎外・不信関係である。用務員の間には、昇進・担当個所の配置をめぐる競合関係がある。労働環境にも、より働きやすい建物、より働きにくい建物がある。具体的にいえば、建物内の掃除個所が多いか否か、また、その大学関係者が用務員に協力的か否か、ということが働きやすさ、あるいは働きにくさに関係する。つまり、担当個所の配置によって労働が楽になったり、反面、大変になったりするのである。

この昇進や担当個所の配置は、管理側や同僚との対人関係や勤務成績に左右される。そのため、自らの評判を下げることにつながるような情報を他者に伝えることには、リスクが伴う。具体的には、管理側や同僚と衝突すれば、不利な立場に立たされる可能性が高くなる。そのため、衝突につながりそうな情報は、管理側や同僚には普及されない。

また、上記の昇進・担当個所をめぐる競合関係は、用務員間の相互疎外・不信的な対人関係につながっている。たとえば、用務員たちは、用具の取り扱い方についてのノウハウをほかの同僚に教えたら、他の同僚がそれを改善してよりよい成績をあげるかもしれない、という恐れから、器具の取り扱い方すらも他者に伝えない。つまり、他者が優位になることにつながりそうな情報は普及されないのである。

また、CETA 研究でのマスメディア利用についての議論とのかかわりから、用務員たちにとっての、情報源としての公共図書館についても議論

が行われている。調査結果として、公共図書館が現状ではほぼ用務員に利用されていないことが提示されている。したがって、上記の情報ニーズに関係する情報を公共図書館が整備していくことが必要である、と論じられる。そのためにはさらなる日常的情報についての研究が必要である、ということも、続いて論じられる。この成果についての議論の主旨は、CETA 研究とほぼ同様といえる。

まとめれば、用務員研究①では、情報貧困、および情報の普及がなされないことの要因として、「組織体内の地位・立場」、そしてそれと関係した「競合関係、相互疎外・不信関係」が新たに提示されたといえる。

CETA 研究から用務員研究①までの、Chatman の論点の要点は、以上に論じてきたとおりである。

C. 理論形成期第 1 期の議論のまとめ

1. なぜ「情報普及の観点からの検討による情報貧困、貧困者の情報探索・利用の再発見期」なのか

CETA 研究では、普及理論、オピニオンリーダーシップ論を用いて、CETA 労働者の情報普及が調査された。その成果は、2 点にまとめられる。1 点目は、情報が普及されないことがあり、このことがある種の情報についての情報貧困につながっているということの発見である。そして 2 点目は、経済的貧困性を情報貧困の唯一の要因として考えるわけにはいかず、ほかにもさまざまな要因がありうるということの発見である。また、情報貧困につながる要因として、情報の種類が見いだされた。

これらは、理論・既往研究に対するアノマリーとして見いだされた。上記 2 点のうち、前者は、普及理論に対するアノマリーである。後者は、経済的貧困を情報貧困の核たる要因としていた既往研究に対するアノマリーである。両者は、情報貧困と貧困者の情報探索・利用についての過去の研究の知見をとらえ直す必要があることを示していた。このことから、情報貧困、貧困者の情報探

索・利用が再発見されているといえる。

用務員研究①では、引き続き普及理論を適用した考察が続けられた。考察内容は、経済的貧困に代わる、情報貧困の形成要因の探究である。成果として、組織体における地位・立場、そしてそれと関係した競合関係、相互疎外・不信関係という要因が提示された。

以上のまとめから、この時期の検討では、「情報普及の観点からの検討による情報貧困、貧困者の情報探索・利用の再発見」が行われているとみることができる。

2. 理論形成期第1期の情報世界

本項では、本章で行ってきた整理・検討をもとに、Chatmanの情報世界の初めの形を抽出し、再構成して示す(第3図)。

なお、特に検討を行った個所を示したほうがわかりやすいと判断した部分については、検討箇所を〔 〕括弧を用いて文中引用することとする。

a. 対人関係・対人ネットワーク

Chatmanが情報の普及を主題として扱っている以上、対人関係・対人ネットワークが重視されているとみることができる。対人関係・対人ネットワークがないところで、情報の普及を行うことは不可能である。

用務員研究①で焦点化された競合関係や相互疎外・不信関係 [B節5項b目] とは、対人関係・

対人ネットワークの状態を表すものである。

b. 個人

情報の普及などの行為の主体は個人である。個人は、対人関係・対人ネットワークに含まれる。

c. 情報探索・利用

CETA研究で扱われた非正規労働者は求職状態にあり、雇用情報を求める [B節3項a目]。ここに、情報の探索が含意されている。また、情報の普及は、情報の利用の一種ととらえられる。

d. 情報ニーズ

CETA研究では雇用情報が求められていること、すなわち雇用情報に対するニーズが扱われた [B節3項a目]。用務員研究①では業務に関係する情報ニーズが扱われた [B節5項b目]。

e. 情報・情報源

他者との対話、マスメディアなど、多様なものが情報とみなされている。

また、情報の入手先、すなわち情報源として、対人関係・対人ネットワーク、マスメディア、図書館が扱われている。

f. 組織体における地位・立場

用務員研究①では、普及理論との関係で、組織体における地位・立場に焦点が当たることになった。そして、それと用務員間の競合関係、相互疎外・不信関係が結びついていることが描き出されている [B節5項b目]。

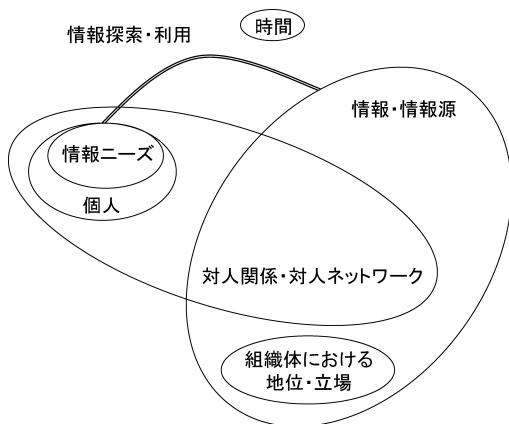
g. 時間

CETA研究では、普及理論における普及プロセスの構成要素の一つである、普及にかかる期間が分析の焦点の一つとなっている。そして、情報の価値には、入手のタイミング(時点)がかわる、ということが指摘されている [B節3項c目]。

第1期の情報世界は、以上のa~gの要素からとらえられていると考える。C節の議論をもって、理論形成期第1期の議論のまとめとする。

III. 貧困者の情報世界の分析の深化期

理論形成期第2期の貧困者の情報世界の分析の深化期には、用務員研究②²²⁾、③²³⁾の、計2本



第3図 理論形成期第1期の情報世界

の論文が含まれる。この時期には、理論形成期第1期で得られた知見を起点として、第1期とは異なる理論を用いて、貧困者（用務員）の情報世界が更に詳細に分析される。

A. 研究目的・研究対象・研究方法論

1. 用務員研究②

a. 研究目的・研究対象

用務員研究②の目的は、“疎外理論の多様な概念を検討すること、そして、どのようにその理論が低所得者の社会・情報環境に関係しているのかを提示すること”²²⁾ [p. 355]³⁴⁾である。研究対象は、用務員研究①と同じく、ノースカロライナ大学の用務員である。

b. 研究方法論

フィールドワークの成果が、「疎外理論」を用いて改めて分析される。疎外理論とは、社会学者 Melvin Seeman による枠組みである。この枠組みは、疎外を、「無力感 (powerlessness)」「意味を見いだせないこと (meaninglessness)」「規範を失っていること (normlessness)」「孤立 (isolation)」「自己疎隔 (self-estrangement)」の五つの概念により説明している²²⁾ [p. 355-357]。各概念の詳細な定義は、注に記した³⁵⁾。

2. 用務員研究③

a. 研究目的・研究対象

続いて行われた用務員研究③の目的は、“なぜわれわれの社会に、その当人たちにとって有用でありうる情報源があるのに、その恩恵を受けようとしない人が存在するのかを検討すること”である²³⁾ [p. 438]。

研究対象は、先の用務員研究と同じく、ノースカロライナ大学の用務員である。

b. 研究方法論

用務員研究③では、フィールドワークの成果が、「即時的満足の理論」を用いて分析される。これは、“経済的貧困者、彼または彼女たちの社会的現実を見る視点、彼または彼女たちが知的・社会的・身体的ニーズを充足する方法”²³⁾ [p. 438]

を説明するものとされている。

理論の各構成要素の具体的検討は、経験的知見の検討と併せて、B節で行う。

B. 特筆すべき点

1. 疎外理論の選択とその意図

用務員研究①の結論部には、人々の日常生活における情報の発見、利用、共有の研究のために、さらなる理論の発展が必要であることが述べられている。また、さまざまな理論の要素間の関係、この関係に関連する状況的要因についての検討が必要だと主張されている²¹⁾ [p. 278]。ここで「理論」という語の指示対象はそれほど明確ではないが、用務員たちの情報探索・利用を説明するために用いる理論と広く解釈することに問題はないだろう。

そして、疎外理論が選択された理由は、用務員研究①までに用務員間の相互疎外・不信関係が、情報が共有されないことの要因となっていることが見いだされたためである²²⁾ [p. 355]。情報貧困と貧困者の情報探索・利用を追求するうえで、相互疎外・不信関係に目をつけ、この方面から分析を進展させることが意図されたのだと解釈できる。また、疎外関係との関係で、労働環境が情報源としてみなされていないのならば、何が情報源として用いられているのかということも問題関心として挙げられている。

なお、用務員研究②では、用務員たちに対し、“組織サービスの周辺に生きる人々”²²⁾ [p. 355] という表現が与えられている。ここには、Chatman のマージナル性への関心が見て取れる。

次項では、疎外理論を適用した分析をみていく。

2. 疎外理論からみた用務員たち：用務員研究②における記述・分析

a. 疎外関係

用務員研究②では、まず、疎外理論の5概念がフィールドワーク成果に表れているか、ということの分析が行われる。結果として、5概念のう

ち、「無力感」「意味を見いだせないこと」「孤立」「自己疎隔」の4概念が、フィールドワークから支持された。述べられている内容を簡潔に整理すれば、次のようになる。

用務員たちは、自分たちの労働環境で問題、たとえば学生たちの非合理的行動があったとしても、自力ではどうしようもできないと感じている。また、管理者が自分たちの代弁者となってもくれないと感じている（無力感）。長く働いても、それらの問題を扱えるような立場に立つような昇進の機会はないだろう、ととらえている（意味を見いだせないこと）。自分の立場は自分で守らなくてはならない。同僚は信用がならないので、大事なことは同僚にいわない（孤立）。多くの用務員は、自らの仕事に内的な意味づけを持っていない（自己疎隔）。たとえば、「仕事だからやっている」といった回答がみられる。

以上より、用務員たちは、疎外関係にあるとみなせる²²⁾ [p. 358-361]。また、疎外関係の成立に関係する用務員たちの心理と労働環境のとらえ方が理論との関係でより詳細に描き出された。

b. 用務員たちの情報探索・利用

Chatman は、用務員間に疎外関係が成立している、と述べた後に、用務員たちの情報探索・利用を詳細に描き出している。具体的には、マスメディア利用と対人コミュニケーションの二つの局面から検討が行われている。

i. マスメディア利用

過去の研究では、経済的貧困者は、その教育程度との関係から、利用にあたって高い教育程度を必要とする印刷物をあまり読まず、即時的満足を求めて娯楽的コンテンツを好む、という知見が示されていた。この知見には、支持される部分と支持されない部分があった。

支持された部分は、用務員は娯楽的コンテンツを多く消費するということである。一方で、支持されなかった部分は、用務員が頻繁に印刷物（新聞など）を用いて情報を探索している、ということであった。探索される情報は、世界の動き方（たとえば、世界で人種差別がなされていることなど）をよりよく知ることや、金銭的心配・育

児・犯罪といった問題に対処している男女あるいは家族間の関係性といったものである。また、用務員たちは、聖書をよく読んでいた。このことから、貧困者が印刷物をあまり読まない、と一概にいうことはできない²²⁾。このような情報の探索・利用は、自分たちのいる世界がどのような世界であるか、ということについての用務員たちのとらえ方を再強化する役割を果たしていた [p. 361-365]。

ここでは、理論形成期第1期の研究で見いだされた過去の研究に対するアノマリーについての検討が詳細化されている。その中で、用務員が手にする情報・情報源が用務員の日常的関心に応じたものであり、情報探索・利用が世界のとらえ方を再形成するという知見が導かれている。

ii. 対人コミュニケーション（人的情報源の利用）

疎外関係のため、用務員たちはインフォーマルな情報共有経路を持たず、情報は共有されない。情報共有が起こるためには、この活動に支援的な社会的環境 (social milieu) が存在する必要がある。この社会的環境とは、その中に暮らす人の生活が不満なものであったり、その中に暮らす人々が互いに協力し合うことに消極的である環境である。このような社会的環境は、情報の普及を促進するというよりは、妨げることにつながる²²⁾ [p. 365-366]。

用務員研究②の要点は以上である。

3. レリヴァンス：用務員研究②のまとめ

Chatman は、結論部で、用務員研究の成果を次の3点にまとめている。1点目は、用務員間に疎外関係が成立していることが確認されたこと（疎外理論が用務員に当てはまったこと）である。2点目は、印刷物を含むマスメディアが、用務員の日常的関心に応じた形で利用されていることである。3点目は、情報共有が起こるためには、この活動に支援的な社会的環境が存在する必要があることである。

そのうえで、レリヴァンスについての議論がなされている。レリヴァンスとは、ごく簡潔にいえ

ば、ある情報がある人の生活にとって関連性を持つか、あるいは有用か否かということを目指す概念として扱われている。つまり、情報が目下の生活について関連したり、有用であれば、その情報はレリヴァントだと判断される。一方、情報が目下の生活について関連していなかったり、有用でなければ、その情報はレリヴァントでないと判断される。

このレリヴァンスについての議論は、用務員研究②の知見を考察するうえで重要だと考えるので、少し長くなるが、次に引用する。

本研究を、より伝統的な図書館研究に比して幾分ユニークなものとしている側面とは、人々が彼または彼女たちの社会的世界の中で相互作用する際の生き生きとした、共通の経験を示すようなデータを利用していることである。情報源を人々が用いるのは、ニーズが起こったときである、ということも、本研究の結果から明らかになっていることである。そしてより重要なこととは、理論を開発するという視点から見れば、この研究はレリヴァンス問題についての科学的推論を可能にする、ということである。技術的視点ではない視点から見れば、問題状況に向き合う低所得の人々を検討する際に、この概念は何を意味するだろうか？

この特性についての研究は、図書館に焦点を当てて作り上げられたモデルには、おそらく適合しないと思われる。そのようなモデルの中では、利用者 (patron) とはすなわち、図書館の役割に感謝し、情報ニーズを満足する回答を得る方法を理解している、教育された利用者であるとして見られている。

この研究は図書館に焦点を当てた研究ではない。それにも関わらず、本研究の成果は、情報とその利用について何かを明らかにしている。顕著な成果として現れているのは、これまでほとんど研究されていなかった社会的環境について、よりよい理解をする必要がある、ということである。(中略) ひとたびこ

の理解が満たされたならば、公式の情報と、日々の生活における関心に焦点があたる情報の間の関連を、より明確な形で発見することが可能となるかもしれない²²⁾ [p.367, 引用個所の [] 内は筆者加筆]

Chatman が上記引用個所で示している主張を解釈していくと、次のようになる。

引用個所の「技術的な視点」という語は、伝統的な図書館サービスや、図書館ないし情報検索システムを用いた情報探索・利用を前提とした情報利用研究のことを指しているとみてよいだろう。それらの中で想定されている利用者は、情報探索・利用の方法を教育されており、図書館を情報ニーズを満たすために用いる人々、というものである。

彼女がこの研究を通してみたのは、図書館利用法についての教育を受けた人々ではない。それにもかかわらず、用務員は用務員の関心に応じて情報探索・利用を行っていた。

そこで、彼女は、用務員のような人々の情報探索・利用の実態についてのさらなる研究が必要であると主張する。研究の欠如から、彼または彼女たちの情報探索・利用の実態がまだ十分に理解されておらず、彼または彼女たちにとっての情報・情報源のレリヴァンスという問題もこれまでの研究ではほとんど扱われていない。この点についてのより詳細な理解が得られた暁には、図書館が備えているような情報源のうち、どのようなものが上記のレリヴァンス (レリヴァンス判断) と関連するのか、ということがみてとれるだろう。これらの理解は、用務員などの人々に向けたサービスの設計・展開を考える際に必要となる。

彼女が上記引用個所で行っている主張は、以上の内容を持つ。この議論が重要だと考えられるのは、次の2点の論点が提示されているためである。1点は、用務員の情報探索・利用について、レリヴァンス概念の導入による積極的な理由づけがなされていることである。ここまでの研究では、過去の研究へのアノマリーが提示され、情報探索・利用 (情報普及) がなされないことの要因

が探られる一方で、情報探索・利用がなされることの要因は明確には提示されていなかった。用務員研究②では、そこから一步進んで、用務員の日常的関心とそれに照らしてなされるレリヴァンス判断が、情報探索・利用がなされる際の要因として見いだされている。この点は、用務員研究③の目的設定に反映されることとなる。

関連してもう1点は、その時点までの図書館サービスや情報利用研究の視点が中産階層の情報ニーズ理解に基づいていることの指摘である。Chatmanは、これまでの情報サービスや研究が、「情報探索・利用の方法を教育されており、図書館を情報ニーズを満たすために用いる人々」の情報ニーズを基準にサービスや研究を計画してきたと考察する。しかし、この視点から有用なものとして提示されている情報源は、「図書館利用法についての教育を受けた人々ではない」用務員に利用されていない。これらのことから、Chatmanは、サービスを拡充しようとするのならば、対象者（用務員）の視点から情報ニーズを理解する必要がある、と論じている。

晩年のISIC基調講演の結論部でも、これと主旨の議論が行われている⁶⁾ [p. 16]。そのため、このことは、Chatmanの大きな問題意識となっていたと考えられる。

4. 用務員研究③の目的の解釈

用務員研究③の目的は、“なぜわれわれの社会に、その当人たちにとって有用でありうる情報源があるのに、その恩恵を受けようとしない人が存在するのか、ということを検討すること”²³⁾ [p. 438]である。「有用でありうる情報源」の意味には二つの局面があり、いずれも即時的満足の理論の適用理由に関係していると考えられる。

一つ目の局面の説明から始める。ISIC基調講演では、即時的満足の理論の採用について、次の論述がある⁶⁾ [p. 5]。

もし、彼または彼女たちが自身たちによっては自身の問題を解決できないと認識するような世界に暮らしているのだとすれば、どのよ

うな種類の事物 (things) が、自身たちにとっての日常的現実に適応するための方法の探索に、彼または彼女たちを動機づけるのだろうか。ここまでの議論で、疎外理論が限界を持つということが明確になった。改めて述べれば、疎外理論の問題とは、それが、ある人の疎外の感覚の決定的要素となるものとしての情報、ということについて何ら見通しを与えてくれない、ということにある。

私を即時的満足の理論に導いた研究課題とは、単純に言えば、次のものである。もし、ある人が勤務する団体 (institution) が情報源として影響を与えることがあるとすれば、それはどのような影響を与えるのか⁶⁾ [p. 5]。

本研究で行ってきた議論をもとにして、引用箇所は次のように解釈できる。

「自身たちによっては自身の問題を解決できないと認識するような世界」とは、疎外関係が成立している用務員たちの労働環境である。そこでは、仕事上解決したい問題があっても、疎外関係が原因となって対人コミュニケーションの経路を容易に使うことができない。そのため、問題の解決が難しくなっている。一方で、用務員たちによるマスメディアを用いた探索をみるに、情報探索自体が行われていないわけではなかった。それは、彼または彼女たちの日常的関心に応じる形で行われていた。このことが、用務員研究②の成果としてみえてきたことだった。

それでは、疎外理論はなぜ研究を継続するうえで限界があったのか。この理由が、「ある人の疎外の感覚の決定的要素となるものとしての情報」という表現に表されている。疎外理論は、疎外の感覚の内容を説明するものである。そのため、疎外関係、疎外の感覚が成立しているか否かを判定する手段とはなる。その関係・感覚の成立は、そもそも用務員にとって有用 (レリヴァント) であり得る労働環境 (「勤務する団体」) が、情報源として容易に利用できないこととつながっていた。しかし、そもそも疎外関係、疎外の感覚が、労働環境の中でどのように情報とかかわって生じてく

るのか、ということとは理論の主たる説明範囲とはならない。また、彼または彼女たちの情報探索・利用の「動機」にかかわる日常的関心とはどのようなもので、それは用務員の生きる世界とどのように関係して生じているのか、ということにも言及できない。

つまり、疎外理論の適用を通じて見いだされたレリヴァンス判断に関わる問題は、疎外理論によってはそれ以上追究できない。そのため、より広範な範囲を説明するような理論の適用が必要となる。以上が即時的満足の理論の適用理由を説明する一つの局面である。この局面を、用務員のレリヴァンス判断メカニズムに対する追究の局面、と呼んでおく。

もう一つの局面は、用務員たちの視点と情報専門職（研究者、図書館員）の視点の違いにかかわっている。Chatman は、用務員研究②で、図書館サービスや情報利用研究の視点が中産階層の情報ニーズ理解に基づいていることを明らかにした。そのため、情報専門職の視点からみて「有用であり得る情報源」は、用務員たちからみると有用ではないことがしばしばある。そのため、サービス拡充のためには、用務員たちにとってどのような情報源がレリヴァントかということを見定める必要がある、というのが彼女の主張であった。このことに関連して、用務員研究③では、中産階層と用務員がところどころで対置されて議論が進められることとなる。これは、レリヴァンス判断のメカニズムの特徴を、ほかの人口集団と対置することでより明確に理解しようとする試みととらえうる。この局面を、用務員のレリヴァンス判断メカニズムの、中産階層との対置を通じた明確化の局面、と呼ぶこととする。

用務員研究③の目的は、以上の二つの局面を含むものとして理解できると考える。

5. 即時的満足の理論からみた用務員：用務員研究③における記述・分析

上記の二つの局面からなる目的の追究のために、Chatman は、レビューを通じて既往研究を整理し、6要素により構成される即時的満足の理

論を提示する。即時的満足の理論の提示のために行われたレビューにおいては、用務員が低階層に所属していること、そして用務員の経済的貧困性に焦点が当てられている。これは、中産階層との対置が念頭に置かれていることが理由だと考えられる。

即時的満足の理論は、それまでの普及理論や疎外理論と違って、確立された理論ではない。むしろ、それは、低階層の人々がニーズの即時的な満足・充足を志向した社会的世界に暮らしているとみなす²³⁾ [p. 438] 既往研究の中で、その低階層の人々がどのような生活スタイルにより生活していると特徴づけられているかということ、Chatman の観点からいくつかの要素（キーワード）により再構成して示した分析枠組みである。要素にかかわる説明は書き分けられているが、各説明の間に重なる部分も多い。

以下の議論では、レビューされた既往研究に Chatman がどのような要素を見て取ったか、それがどのようにデータと対応づけて議論されたかということセットにして記述していくこととする。

a. 小さな世界の中での生活

i. 要素の内容

既往研究の中で、低階層の人々は、小さな世界の中で生活している人々だと特徴づけられている。“低階層の人々は、世界を狭くローカルに捉えるため、彼または彼女たちの世界の外側で生成する情報は、彼または彼女たちの重要な関心の対象とはならない”²³⁾ [p. 438]。低階層の人々が閉じた世界、つまり、慣れ親しんだものではない経験（情報探索・利用もこれに含まれていると見てよい）への接触自体に制限がある世界に暮らしていることが、上記の世界のとらえ方につながっている²³⁾ [p. 439]。

ii. データと対応づけた議論

Chatman は、そもそも情報に接する可能性がない世界という既往研究の中で論じられてきた意味で、用務員の世界が活気のない情報世界 (an impoverished information world) なのではない、と論じる。むしろ、(情報に接する可能性自体は

あるが)昇進や配置転換につながるような情報を
用務員が見つめることができなかつたり、見つけ
てもそれを自分のために利用できないという意味
で活気のない情報世界なのだ、と論じる。また、
用務員たちが長期的に自らの待遇を改善していく
計画を立てない傾向にあることも、活気のない情
報世界を作り出している。たとえば、彼または彼
女たちは、ほかの職の口や、賃金向上に向けた自
らの技能向上のためのトレーニングを受けたりは
していない²³⁾ [p. 443]。

つまり、ここで論じられているのは、用務員の
世界が初めから情報貧困の世界と決定づけられた
世界ではない、ということである。むしろ、用務
員の世界のとらえ方や行為が用務員の世界で生じ
ている情報貧困の要因となっている、ということが
示されている。これは、CETA 研究で見いだ
された内容 (II 章 C 節 1 項参照) と近似してい
る。

b. 低い期待と宿命信仰 (belief in luck)

i. 要素の内容

既往研究の中で、低階層の人々は、次のよう
に特徴づけられている。“経済的貧困者は、未だ
行ったことのないような努力の末に成功がもたら
される、とはあまり考えていない。結果として、
彼または彼女たちは、新たな機会を役立てようと
企てない。彼または彼女たちは、成功がもたらさ
れるとしても、それは、幸運、運命、宿命といっ
たことによって予め決まっているからだ、と捉え
ている”²³⁾ [p. 438]

ii. データに対応づけた議論

この要素は、次の結果により支持された。用務
員たちは、自らの能力に低い期待しかしておら
ず、それによって労働環境を変えられるとは思っ
ていない。良いことがあれば、それは幸運だった
からであり、悪いことがあれば、それは幸運では
なかったからである²³⁾ [p. 443-444]。

c. 一次レベルの生活スタイル

i. 要素の内容

既往研究の中で、低階層の人々は、一次レベル
の生活スタイルによって暮らしていると特徴づけ
られている。“低階層の人々は、彼または彼女た

ちの社会的環境の中で起こっている注目すべき出
来事について、主に自分たちと似た立場にある
人々を通じて知る”²³⁾ [p. 438]。

このことの説明に、一次レベルの知識と二次レ
ベルの知識という概念が利用されている。一次レ
ベルの知識とは、“自身の経験か、目下の話題に
なっている事物について知識があると既に認めら
れている他者からの伝聞”²³⁾ [p. 440] に基づく知
識である。二次レベルの知識とは、“ある人によ
るその時点の事物のアウトアネスには存在しな
い”²³⁾ [p. 440] 知識である。この知識は、ある人
自身の経験の外側の世界で生成する。他者からの
伝聞は、その他者の経験が自らの経験と同等に信
頼してよい (「認められている」) か否かというこ
とにより、一次レベルの知識か二次レベルの知識
かということを判断される。

ii. データに対応づけた議論

この要素は次の結果により支持された。用務員
に利用される情報は、一次レベルのものであった。
具体的には、マスメディア利用と、他者からの情
報の受容が議論の引き合いに出されている。マス
メディア利用については、用務員たちの日々の経
験と親近性のあるものが利用されていた (内容
は、B 節 2 項 b 目 i と共通)。

また、他者からの情報の受容の基準には、三つ
の領域があった。一つ目の領域は、自らの経験に
照らし合わせて受容できるかどうか判定する、と
いうものである。二つ目の領域は、複数人の他
者に聞いて、情報が受容できるかどうか判定す
る、というものである。三つ目の領域は、他者が
信頼に足る人物かどうかによって、情報が受容
できるかどうか判定する、というものである²³⁾
[p. 444-445]。

上記の諸点から、用務員に“情報が受容される
ことになるのであれば、それは確かめることがで
きる種類のものでなければならず、一つあるいは
それ以上の親しんだアクセス可能な情報源から引
き出せるものでなければならぬ”²³⁾ [p. 445] こ
とがわかった。

関連して、他者への不信から、情報が個人化さ
れるという論点も提示されている。これは、他者

が信用ならないため、情報探索をすることによって自らの状態について他者に知らせたくない、ということを示している²³⁾ [p. 444]。

d. 制限された時間の地平 (limited-time horizon)

i. 要素の内容

既往研究の中で、“低階層の人々は、中産階層の人々とは異なる時間資本システムを持っている”と特徴づけられている。“たとえば、彼または彼女たちは、時間というものについて、ごくごく現在 (the immediate present), そしてごくごく最近 (the very recent past) のことしかみていない”²³⁾ [p. 438]。

つまり、中産階層の人々は将来に向かった計画・努力を行うという意味で将来志向だが、低階層の人々はその日志向だと特徴づけられてきた、ということである。

ii. データに対応づけた議論

この要素は、次の結果により支持された。用務員たちは、将来、現在よりよい立場に立つために、いくらかの投資 (努力) が必要だということを知っている。しかし、現在やるべき多くのこの前に、現在の立場で仕方がないとあきらめ、将来のために努力することに意義がないととらえていた²³⁾ [p. 445]。

e. インサイダーの世界観

i. 要素の内容

既往研究の中で、経済的貧困者は、世界を“非常にローカルに、具体的に、予測不可能なものとして、そしてしばしば敵対的に捉えている”²³⁾ [p. 438] と特徴づけられている。

この要素の説明には、インサイダー・アウトサイダー概念が導入されている。Chatman は、経済的貧困者を指してインサイダーとする。そして、その世界の外側にいる人々を指してアウトサイダーとする。アウトサイダーが暮らす世界は、インサイダーの外側にある世界 (larger society) である。そして、インサイダーの世界観の特徴を、次のように整理している。

「ローカル」性と「具体」性は、インサイダーの関心が、自身の暮らす世界・現在に志向したものだということを示す。なお、このことは、別の

要素にかかわる説明でも示されている。続いて、「予測不可能」性と「敵対」性が説明される。これは、インサイダーが外部の世界をどう眺めているかということを示す。予測不可能性とは、インサイダーが外部の世界を経験したことがないため、そこでの出来事を予測することができないということを示す。敵対性は、文字通り、インサイダーが外部の世界を敵対的にみているということを示す²³⁾ [p. 441]。

Chatman は、続いて、上記の特徴が、インサイダーのレリヴァンス判断とかかわり合っていることを論じる。インサイダーは、インサイダーの世界に関連がある (レリヴァントな) ことを重視する。そのため、インサイダーの世界観は、ローカル性と具体性を帯びることとなる。他方で、アウトサイダーはインサイダーの生活についてよく知らない人々だとみなされる。そのため、アウトサイダーのいうことはインサイダーに関連がない (レリヴァントではない) ものと判断される²³⁾ [p. 441]。直接には書かれていないが、文脈上、アウトサイダーがレリヴァントではない人々と判断されることが、上記の予測不可能性や敵対性に結びついているということが論じられていると解釈してよいだろう。

ii. データに対応づけた議論

用務員たちは、インサイダーの世界観を持っていた。“この姿勢は、彼または彼女たちがローカルな出来事に注意を向けているということ、自身によって物事を行うこと (rely on self) がよいという信念を抱いていること、親密な社会的ネットワークに属していない人を信用しないことによって示された”²³⁾ [p. 446]。

f. マスメディア利用

i. 要素の内容

既往研究の中では、“[低階層に暮らす人々、あるいは経済的貧困者にとって] マスメディア、特にテレビは、逃避・刺激・現実離れた空想 (fantasy) のためのものだといわれている”²³⁾ [p. 438] (引用箇所 [] 内は筆者補足) と特徴づけられている。

ii. データに対応づけた議論

用務員たちは、確かに逃避などのためにマスメディアを用いていたが、その頻度が中産階層の人々と比べて取り立てて多いというようには見えなかった。つまり、マスメディアが、「逃避・刺激・現実離れした空想 (fantasy) のため」だけに用いられているわけではなかった。テレビは、娯楽のためだけに用いられていたわけではなく、天気や地域のニュースについての情報を得るためにも用いられていた²³⁾ [p. 447]。

直接的には論じられていないが、ここでの議論は、疎外理論の知見 (B 節 2 項 b 目 i) と同様に、過去のマスメディア研究における経済的貧困を情報貧困の核たる要因とみなす視点に対する反論だとみてよいだろう。

6. 用務員たちのレリヴァンス判断と世界観：用務員研究③のまとめ

本研究では、用務員研究の目的を、用務員のレリヴァンス判断メカニズムに対する追究の局面、そして、用務員のレリヴァンス判断メカニズムの、中産階層との対置を通じた明確化の局面、の二つの局面から解釈した。そして、即時的満足の理論の適用によって、5 項にみたような研究が進められた。

研究プロセスの中で、レリヴァンス判断に結びついた用務員たちの世界のとらえ方 (世界観) の多様な側面が説明された。筆者なりに総括すると、次の内容の説明がなされている。

用務員は、小さな世界に暮らす (5 項 a 目) インサイダーである (5 項 e 目)。そこでの世界観は、現在志向である (5 項 d 目)。この現在志向は、反面、自己の能力への低い期待や宿命信仰と結びついている (5 項 b 目) また、用務員の世界観は、ローカル性・具体性志向である。これは、反面、用務員の世界にいない人々、すなわちアウトサイダーに対する予測不可能性・敵対性と結びついている (5 項 e 目)。用務員たちは、用務員の世界の現在の関心に合致する情報源を用いる (5 項 c 目, f 目)。かつ、特に、他者を情報源とする場合には、ローカル性・具体性という点から

信頼できる情報のみを受容する (5 項 c 目)。これらの説明は、しばしば中産階層との対置を通じて進められた。

以上の研究を経て、Chatman は、用務員たちがなぜ“当人たちにとって有用でありうる情報源があるのに、その恩恵を受けようとししない”²³⁾ [p. 438] のかという問いに回答を与える。その理由とは、現在に関係がない投資 (extra resource) は用務員にとって現実的選択肢 (viable alternative) とはならない、ということである²³⁾ [p. 447]。これは、用務員は、上記の世界観と照らし合わせてレリヴァントではないと判断した情報を探索したり利用したりしないことを意味していると解釈できよう。

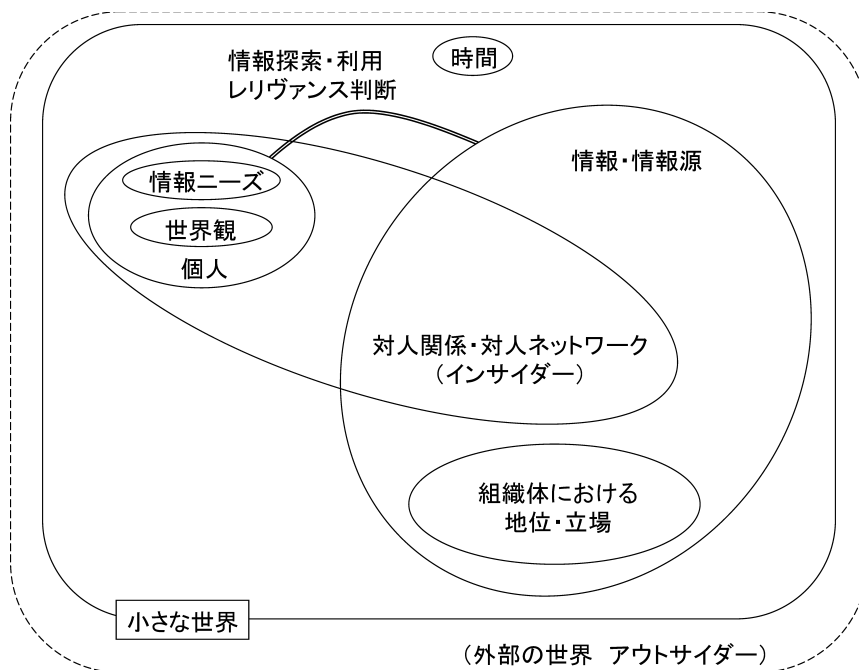
用務員の世界観は、用務員にとっての今、この現実 (immediate reality) を志向する。そして、目の前の現実を即時的に満足する情報が用いられる。この意味で、たとえば、情報研究者によって利用されるような文献は、用務員にとってレリヴァントではないのである。

C. 理論形成期第 2 期のまとめ

1. なぜ「貧困者の情報世界の分析の深化期」なのか

理論形成期第 2 期の検討は、全体として次のようにまとめられる。用務員研究①での分析を深化させる必要があるとの問題意識に始まり、用務員研究①で用務員間の相互疎外・不信関係が発見されたことから、疎外理論を用いた分析がなされた。分析の成果として、まず、用務員間に疎外関係が成立していることが確認された。そして、印刷物を含むマスメディアが、用務員の日常的関心に応じた形で利用されていることが見いだされた。また、情報共有が起るためには、この活動に支援的な社会的環境が存在する必要があることも見いだされた。

これらの知見に基づいて、Chatman はレリヴァンス概念を導入し、用務員の情報探索・利用について、積極的な理由づけを行う。つまり、用務員は用務員としての日常的関心に照らし合わせ



第4図 理論形成期第2期の情報世界

てレリヴァンス判断を行うということが論じられた。また、その時点までの図書館サービスや情報利用研究の視点が中産階層の情報ニーズ理解に基づいており、そのため、公共図書館は用務員にとってレリヴァントな情報源となっていないことも論じられた。

以上の用務員研究②の成果に基づき、用務員研究③では、用務員のレリヴァンス判断メカニズムが追究される。その追究は、しばしば中産階層と用務員の対置を通じて進められた。この検討では、即時的満足の理論が適用された。即時的満足の理論に照らし合わせて、小さな世界に暮らす用務員のレリヴァンス判断に関係する世界観の多様な側面が説明された。

以上の検討を通じて、貧困者（用務員）の情報世界の分析が深化されている。このことから、この時期を、「貧困者の情報世界の分析の深化期」と呼ぶことができる。

2. 理論形成期第2期における情報世界

1項にまとめた研究を通じて、情報世界が拡大

されている。大きく3点の要素が新たに取り込まれていると考える（第4図）。なお、前章と同様に、[] 括弧を用いて文中引用を行う。

a. レリヴァンス判断

情報・情報源の探索・利用にかかわる要素として、レリヴァンス判断が新たに見いだされている [B 節3項]。レリヴァンス判断は、b. の世界観と照らし合わせてなされる。

b. 世界観

レリヴァンス判断にかかわるものとして、世界観という要素が見いだされている。これは、用務員（ないし低階層の人々）が世界をどのように捉えているかということを示す。たとえば、現在志向、ローカル性・具体性志向などがその特徴として挙げられた [B 節5, 6項]。この世界観は、用務員の暮らす小さな世界に応じた内容を持つ。

c. 小さな世界

用務員の暮らす世界が、小さな世界だという特徴付けがなされている [B 節5項a目]。この時点での小さな世界は、低階層の人々が住む世界という意味合いを持つ。

以上の a～c. の要素が、情報世界に追加されている。C 節の議論を持って、理論形成期第 2 期の議論のまとめとする。

IV. 情報貧困、貧困者の情報探索・利用の とらえ方の転換につながる発見期

理論形成期第 3 期の情報貧困、貧困者の情報探索・利用のとらえ方の転換につながる発見期には、Garden Tower 研究①²⁴、②²⁵ の、計 2 本の論文が含まれる。ただし、Garden Tower 研究①の内容は、②に包摂されているため³⁶、本研究では Garden Tower 研究②に焦点を合わせた検討を行う。

A. 研究目的・研究対象・研究方法論

1. 研究目的

Garden Tower 研究の焦点は、過去の研究でほとんど調査されてこなかった、“独居する老人女性たちの情報ニーズと助けを求める行動 (help-seeking behavior) を検討すること”²⁵ [p. 28] である。具体的には、次の 6 点からなる研究課題が挙げられている。

- (1) 老後を過ごす人々からなるコミュニティ (a retirement community) において独居する女性たちの情報ニーズは何か。
- (2) 独居する女性たちは、どのように彼女たちの助けになる情報 (helping information) に気づくのか。
- (3) 女性たちの環境において、情報探索行動の助けとなる要素とは何か。
- (4) 支え (assistance) あるいは助けを求めることを妨げるかもしれない要因とは何か。
- (5) 日常的情報に関連して、住人たちが共有しているのは、どのような種類の事物 (things) か。
- (6) もしあれば、適応につながる情報、あるいは、助けとなる情報の見通しを得るうえで、老後を過ごす人々からなるコミュニティに暮らすことが果たしている役割とは何か²⁵ [p.28]。

2. 研究対象

研究対象は、上記の研究課題に表れているように、Garden Tower (b. に後述) に独居する老人女性たちの情報ニーズと助けを求める行動である。

a. 老人女性たち

入居者の多くは白人女性であり、比較的立場の近い、同質性の高い人々である。このことを示すために、平均年齢や信仰する宗教等、いろいろな人口学的特性が示されている²⁵ [p. 49-50]。

彼女たちは、すでに引退して老後の生活を送っているため、一線の生活を送ることができないと社会からみなされているということ、収入源があまりなく経済的に貧しくなっていくということ、他者とのやり取りが少なくなっていくということから、一般的に「貧困者」とみなせる、とされる²⁵ [p. 23-25]。

ここでは、経済的貧困性というよりも、「一線の生活を送ることができないと社会からみなされている」というマージナル性に着目した対象選択がなされているとみることができる。つまり、労働から引退する前の人々が大多数を占める社会の中で、老人女性は周辺的な存在だとみなされているのである。

なお、特に老人女性たちを取り上げた理由は、述べられていない。第 2 期までの分析をさらに深化させたかったのだろうが、それ以上の詳細は、直接には不明である。

b. Garden Tower

Garden Tower とは、独立した高齢者のための集合住宅 (an independent-living retirement community) であり、Chatman の当時の勤務校であるノースキャロライナ大学チャペルヒル校から数マイルのところの位置する Textile Town (この街の名も匿名化された後の呼称である) の中にある。Garden Tower は閑静な環境で、かつ、各種の生活に必要な店や銀行、病院と近接している。さらに、美術館訪問や小旅行も行いやすい、交通の便のよい場所にある。

Garden Tower では、日中に看護師のサービスを受けられる。ただし、ナーシングホーム

(nursing home)ではないので、看護師が世話できる範囲を超えた病気の場合は、自分で病院に行くこととされている。その他、施設内には、施設の運営にかかわるサービス（会計など）を行うスタッフや、警備員、掃除人、カフェテリアの給仕、美容師などがいる。

また、入居者各自の部屋には、それぞれ小さなキッチンがある。そこで作った料理を持ち寄って、一緒に食べるための、開放的な、ダイニングルームという空間も用意されている。

このような Garden Tower で生活するために、入居者には、ある程度の介護を受けつつも、「自立した生活 (independent-living)」を送ることができる状態にあることが必要とされる。自立した生活について直接的な定義は示されていないが、本文の内容からすれば、入院加療を要さない健康状態であること、上記サービスを受けるための入居費を払える程度に経済的にある程度安定した生活が可能なこと等が必要とされていると読み取れる²⁵⁾ [p. 2, 50]。

c. 情報ニーズと助けをを求める行動

フィールドワークに先立って、老人女性が抱える一般的な情報ニーズが、文献レビューを通じて整理されている。そして、「喪失 (loss) の扱い」「死と死にゆくこと (dying)」「歳を取るプロセス」「将来の不明確さ」「犯罪対象者となることへの恐れ」「寂しさ」の6領域が提示されている²⁵⁾ [p.25-27]。この6領域は、フィールドワークを進めるうえでの一つの視点として活用されている。

老人女性たちは、このような情報ニーズに対処する上で、「助けとなる情報」を求める。助けとなる情報とは、“助けの源の入手可能性についての情報、そして、助けへのニーズに対応する情報”²⁵⁾ [p. 27]である。

3. 研究方法論

a. データ収集の手法

データ収集の手法は、これまでの研究と同様に、フィールドワークとその中で行われるインタビューである。

b. 分析枠組みとしての社会ネットワーク理論

社会ネットワークとは、“問題に直面した個人を支援する日常的な対人間のやりとり (transaction)”であり、金銭的・情緒的サポートを提供するものとされる²⁵⁾ [p.33]。つまり、各人の周囲に通常あると想定される、支援的な対人関係・対人ネットワークである。

社会ネットワーク理論とは、即時的満足の理論と同じく、Chatman が文献レビューを通じて整理し、作った枠組みである³⁷⁾。ただし、この枠組みは、即時的満足の理論よりもさらに簡素なもので、社会ネットワークを見る際に助けとなる諸側面・諸要素について整理した分析枠組みとみなすことができる。

Chatman によれば、社会ネットワークは、次の側面・要素から分析することができる。

i. 構築的属性 (structural attributes)²⁵⁾ [p. 33-35]

「構築的属性」とは、“それぞれの社会的知己関係のセット (each set of social contacts) の範囲”のことである。言い換えれば、各人が関係する社会ネットワークの範囲を示す。

ii. 同質性²⁵⁾ [p. 34-36]

「同質性」とは、“ネットワークを作り上げる関係性の種類”のことである。Chatman は、この研究においては、同質性という語によって、特に、一次的ネットワーク・二次的ネットワークという種別に言及する、としている。一次的ネットワークとは、家族のことを指す。二次的ネットワークとは、隣人やその他の人々のことを指す。

iii. 密度²⁵⁾ [p. 34, 36-37]

「密度」とは、“ネットワークの構成員の間で交わされる相互作用の特性と度合”のことを指す。つまり、ある社会ネットワークの中で、どの程度の頻度で、生活上有意義な内容を持つやりとりが行われているか、ということである。

iv. 内容²⁵⁾ [p. 34, 37-38]

「内容」とは、“ネットワークの中で交換される社会的・物質的リソース”を指す。たとえば、物品、金銭、サービスなどのことである。情報も含まれる。

v. 分散²⁵⁾ [p. 34, 38-39]

「分散」とは、“ネットワークの構成員の空間的な配置、つまり、ネットワークの互いのメンバーが互いに持つ近接度”を指す。たとえば、家族が遠くに住んでいるか、あるいは近くに住んでいるか、といったことである。

B節では、以上の研究目的・対象・方法論の下、Chatmanがどのような発見に至ったか、を論じる。

B. 特筆すべき点

1. 老人女性たちと社会ネットワーク

Garden Tower 研究の研究対象は、周囲に支援的な対人関係・対人ネットワークがあると想定される人々である。また、社会ネットワーク理論で扱われる対人関係・対人ネットワークも、ある人の周囲に通常あると想定される、支援的なネットワークである。このような（疎外関係ではない）「通常の」対人関係・対人ネットワークは、用務員研究までの Chatman の研究の中では検討されたことがない。

本項の内容から B 節の議論を始めたのは、この対人関係・対人ネットワークの性質が、結果的に、Garden Tower 研究でなされた成果の強い背景となっていくためである。ただし、Chatman は後年、研究対象や社会ネットワーク理論の選択にあたり、これらの発見の内容を事前に想定してはいなかった、と述べている^{6),7)}。

2. 情報貧困: Garden Tower 研究における記述・分析

Garden Tower 研究でのフィールドワークでは、老人女性間の対人関係・対人ネットワーク、そして、老人女性とその生活をサポートする家族や専門職（施設職員や医師など）との対人関係・対人ネットワークに焦点が当たった。社会ネットワーク理論は、フィールドワークとその分析を行ううえで、一般的に有用な視点を提供した²⁵⁾ [p. 123]。

他方でみえてきたのは、入居者が互いに同質性

を見出せるような社会ネットワーク、そして互いに支援を期待できる社会ネットワークに所属しているからといって、その中で何の制約もなく情報入手・伝達がなされているわけではないということであった。Chatman の事前の想定とフィールドの実態は異なっていたのである。なお、この事前の想定は、用務員研究②の成果の一部と対応するものでもある (III 章 B 節 2 項 b 目 ii 参照)。

a. 行為・行動の制約としての社会的規範³⁸⁾

確かに、Garden Tower の入居者たちは、ある程度までは互いを気遣い (looking out), 周囲の社会ネットワークからサポートを受けていた。たとえば、旅行中で留守にしている隣人の郵便物を代理で預かったり、自分の買い物のついでに隣人の買い物を請け負う、といったことである²⁵⁾ [p. 68-73]。

一方で、周囲からサポートを受けるうえで制約があることもみえてきた。入居者たちは、Garden Tower で暮らすことが適切でない、とみなされるような行動、つまり身体的・精神的・金銭的に逸脱して見える行動 (deviant behavior) を慎重に避けていた²⁵⁾ [p. 127]。

A 節に述べたように、Garden Tower は、病院やナーシングホームとは異なる。ある程度自立した生活を営める、ということが入居の条件となる。逆にいえば、自立した生活を営めないと周囲 (家族や隣人、施設職員など) に判断され次第、Garden Tower からの退去、そして同時に、かなり自由の少ない環境への移動を余儀なくされる。このことが、入居者が最も恐れる事態で、何としても避けなくてはならないものである。

Garden Tower からの退去にはつながらなくても、施設内の対人関係から敬遠されることにつながることもある。それは、買い物などの軽い用事を超えて、他者に過度に依存することである。周囲への過度な依存は、周囲から自立能力がないとみなされることにつながる。かつ、依存されること自体も、面倒くさいことである。仮にひとたび周囲から敬遠されるようになってしまうと、Garden Tower での生活はたいへんやりづらいものになってしまう²⁵⁾ [p. 127]。

そのほかにも、細かい決まりがある。たとえば、粗野な言葉遣いは嫌がられる。Garden Tower に暮らす、成熟した老人女性らしい言葉遣いをしなければならない。また、ダイニングルームで、いつも他者が使っている席に誤って座ると争いごとにつながる。Chatman は、フィールドワーク中に、自らこの禁を犯し、争いを経験した²⁵⁾ [p. 132-133]。

以上のように、さまざまなレベルで、入居者たちは適切な振る舞いをし続けなければならない。上に述べたことは、Garden Tower において、行為・行動の適切性を判断する、あるいは、他者により判断される際の社会的規範とされている。その規範に従って、適切な振る舞いをし続けることで、Garden Tower での生活は維持されている。

b. 情報の三つのレベル

a. に述べた理由で、情報探索・利用も適切に行わなければならない。その帰結として、Garden Tower 入居者にとっての情報には、次の三つのレベルがあることとなっている。

i. 一次レベルの情報²⁵⁾ [p. 125-126, 132]

「一次レベルの情報」とは、共有することに、最小限の危険しか伴わないような一般的性質の情報である。たとえば、歳をとることで一般に生じる不都合や、TV 番組についての感想、あるいはどこで信頼できる医者や弁護士を見つけられるかといったことである。

一次レベルの情報は、日常会話の中で利用され、Garden Tower で起こっていることについて、より事情通になることにつながる。この情報を共有する側も受け取る側も、逸脱しているとみなされるようなリスク（逸脱していると周囲からみなされること）にさらされることはない。Garden Tower への新参者は、そのような日常会話を通じて、Garden Tower で暮らすうえでの一般的知識（どの席に座ってよいか、など）を得ることとなる。

ii. 二次レベルの情報²⁵⁾ [p. 126]

一次レベルの情報に対して、「二次レベルの情報」とは、伝達する相手を選ばなければならない情報のことを指す。たとえば、金銭的・法的問題

などの、他の住人に知られたら生活するうえで困る内容がこれにあたる。そのため、このような情報は、家族などのたいへん近い一次的ネットワークの中で交わされる。

iii. 三次レベルの情報²⁵⁾ [p. 126]

「三次レベルの情報」とは、秘密とされる事物のことを指す。これは、他者に知られたら、Garden Tower からの即時退去といった決定的に重大な事態につながってしまうような事物である。

三次レベルの情報は、当人にとって最も離れたネットワークの少数の人に、機密的に共有される。たとえば、医者は、職業的倫理規定上、診療内容を他者に言うことができないので、このような情報を共有する相手となる。

Chatman 自身は、フィールドワーク中に三次レベルの情報が伝達される場面に居合わせることがなかった。そのような情報があるということを知ったのは、Garden Tower で交わされる日常会話を通じてのことであった。そのような情報を暴露してしまった「かわいそうな人」の例は、日常会話の中ではしばしば語られているのだった。

c. 自己防衛、秘密、嘘²⁵⁾ [p. 130-131]

a. と b. に述べてきた理由から、入居者は、常に Garden Tower での生活・社会的な立場を自ら防衛しつつ、生活していかななければならない。孤立しないために適切に振舞うことが、すなわち、「自己防衛」なのである。

b. にみたように、個々人の状況に応じて、情報はさまざまな機密性を帯びることになる。機密性が高い情報になるに従って、その暴露は、入居者個々人の Garden Tower での生活の維持に、深刻な影響を与える。特に、三次レベルの情報は、何としても他者に知られてはならない。つまり、「秘密」にしなければならない。たとえば、自らの健康状態が悪化しているという情報は、「この人はもはや自立した生活を営めない」という周囲の判断に直結してしまうため、他者に開示することはできない。また、健康情報を求める態度も、特定の形ではみせられない。そのような態度自体が、健康状態が悪化していることを示してしま

うためである。

仮に核心に触れるようなことがあったとしても、本当のことは言えないし、言わない。結果として、本当のことについて「嘘」を言って隠すことになる。

d. 生活の維持の手段としての情報探索・利用とその帰結としての情報貧困²⁵⁾ [p. 131]

女性たちは、日々の会話を円滑に進めるために、一次レベルの情報を探索・利用する。他方、二次・三次レベルの情報の探索・利用を差し控え、それを求める態度すらも他者にみえないようにする。このように、情報探索・利用は、Garden Towerでの生活、および、その生活の中での対人関係の維持のための手段となっている。

その帰結として、女性たちは、新参者には有用なこともあるが、一般的にはそう重要ではない情報の共有にいそむ一方で、最も喫緊の必要性がある健康情報などの情報の入手ができない状況に陥っている。

Chatmanは、この状況を「情報貧困」と表現し、この現象から得られる考察を行うことによって、Garden Tower研究を総括している。この考察は、C節の中で扱うこととする。

C. 理論形成期第3期のまとめ：なぜ「情報貧困、貧困者の情報探索・利用のとらえ方の転換につながる発見」期なのか

Chatmanは、社会ネットワーク理論を適用したGarden Tower研究における研究を通じ、貧困者の情報探索・利用についての考察を深めようとした。研究対象となったGarden Towerの女性たちは、周囲にサポートを提供するような対人関係・対人ネットワークのある生活を送っていた。

当初、Chatmanは、対人的な共有が増大されるような社会的世界にGarden Towerの入居者たちが暮らしていると想定していた。このことは、これまでに適用してきた理論の前提でもあり、彼女自身が到達していた知見でもあった（III章B節2項b目ii参照）。普及理論では、対人関係・対人ネットワークがある限り、情報は普及あ

るいは共有されるということが前提とされている。また、情報共有がなされないことの要因が疎外関係にあるとの知見が導きだされたが、ここでは、「疎外関係にない人々は情報共有する」という想定が暗に前提されている。

しかし、上にみたように、このことは常に真ではなかった。「通常の」対人関係・対人ネットワークがある世界でも、情報貧困が生じていた。情報貧困が生じる理由は、入居者たちによる自己防衛のプロセスの帰結であった²⁵⁾ [p. 125-140]。このことは、現実（フィールドワークの成果）と理論の間、および、現実とChatman自身のこれまでの知見の間に大きなアノマリーがあることを意味していた。具体的には、社会的ネットワークがあれば、情報は共有されるという前提の限界である。むしろ、情報探索・利用は、社会的ネットワークや各人の立場の維持にさまざまにかかわっているのである。つまり、情報を探索したり利用したりすることは、単に情報を得たり渡したりということにとどまらず、それ自体が他者との関係性の下で行われるし、意図するか意図しないかに関わらず他者との関係性の変化に直結しているのである。だからこそ、上にみたように、情報を探索する態度自体が人に対し隠されることが生じる。

この洞察・知見をもとに、Chatmanは、CETA研究・用務員研究のデータを再度見返した。そうすると、それまではみえていなかったのだが、過去のフィールドにおいても同じような形で情報貧困が起きているということが改めてみえてきた。そのため、彼女は、上記の洞察・知見が単にGarden Towerのみに妥当するものではなく、貧困者により広く当てはまるものであることを確信するようになる。かつ、彼女は、情報探索・利用と社会的ネットワークや各人の立場の維持の相互反映性を扱うような理論がそれまでに提出されていないと判断する。そのため、自身で理論を形成し、提示することを目指すこととなった。

以降のChatmanの研究では、上記の洞察を元に情報探索・利用がとらえ直され⁶⁾ [p. 6]、三つの理論が提示される。その中では、転換された情

報探索・利用のとらえ方が、具体的に表現されていくこととなる。したがって、この時期を「情報貧困、情報探索・利用のとらえ方の転換につながる発見期」と呼ぶことができる。

第3期の情報世界は、理論提示期に理論の中で具体的に示され、発展されることとなるため、次章で扱う。

II～IV章では、Chatmanの理論形成期の研究の発展を検討した。この検討を通じ、次のようにChatmanの研究の発展を跡づけられることがわかった。第1期では、情報の普及の観点から情報貧困、貧困者の情報探索・利用の再発見が行われた。その知見をもとに、第2期では、貧困者の情報世界の分析の深化が行われた。分析は、第3期でさらに発展され、情報貧困、情報探索・利用のとらえ方の転換につながる発見が見いだされた。このような理解が得られたことをもって、一つ目の研究課題である理論形成期の研究の論点整理は達成されたと考える。

V. 理論提示期

理論提示期において、Chatmanは、「情報貧困の理論」「困われた生活の理論」「規範的行動の理論」の三つの理論を提示する。

本章では、Chatmanの理論の形式面の特徴を確認した後、その形式を利用しながら、個々の理論の内容を順次概観する。続いて、三つの理論を統合的に検討し、彼女が最終的に提示した情報世界、情報探索・利用理解を明らかにする。

A. Chatmanの理論の形式面の特徴

Chatmanの理論の特徴は、理論が命題形式をとること、つまり、命題の組み合わせによって構成されていることである。

説明対象は、「理論名」に示される。この説明対象が、どのような概念・現象を中心として成立しているかということが、「中心的概念」として示される。そして、中心的概念に表される概念・現象が互いにどのように関連し合いながら説明対象を形づくっているか、ということが、「命題」の組み合わせによって具体的に示される。これら

のことを、Chatmanは、「命題は独立して見られるべきものではなく、全体として見られるべきものである」と表現している⁷⁾ [p. 197]。

次節では、各理論の具体的内容を理論名・中心的概念・命題という枠組みに沿ってみたとらえ、その内容をまとめる、という形で、各理論についての検討を進める。

B. 個々の理論の内容

1. 情報貧困の理論

a. 説明対象

情報貧困現象が説明対象である。理論の形成は、Chatmanがフィールドワークを通じて得た情報貧困現象に関わる経験的知見に基づいてなされている。経験的知見の具体的内容は、前章までの議論で詳しく論じたので、ここでは繰り返さない（主にIV章C節参照）。

b. 中心的概念

情報貧困の理論の中心的概念は、「危険を冒すかどうかの判断(risk-taking)」「嘘」「秘密」「状況的レリヴェンス」の四つである。前章ですでに触れたように、この4概念は、第3期の研究成果の中に示唆されている（例：嘘や秘密）が、第3期の成果をもとに、過去の調査研究を通覧する中で明確化されたものである。Chatmanの論述⁷⁾ [p. 198-213]をもとに、筆者なりの表現で説明する。

i. 危険を冒すかどうかの判断

ある行為・行動が、行為者にもたらす利益と不利益を天秤にかけることである。この判断には、後の命題にも表れるように、規範などのさまざまな事物がかかわる。不利益をもたらす場合は、その行為・行動は実行に移されない。

この概念は、言葉こそ変わっているが、「自己防衛」そのものを指していると理解してよい。

ii. 秘密

危険を冒すかどうかの判断とのかかわりで、不利益を避ける意図の下、事実を隠すことである。

iii. 嘘

危険を冒すかどうかの判断とのかかわりで、不利益を避ける意図の下、事実とは異なる情報を他

者に伝えることである。

危険を冒すかどうかの判断・秘密・嘘の3概念については、Garden Towerにおける健康情報の取り扱い、が顕著な例である。

iv. 状況的レリヴェンス

ある情報が、ある個人にとって、ある状況での関心や問題に対して有用性を持つか、それとも不利益をもたらすか、ということを目指す。

c. 命題

下記の命題が提示されている。

- (1) 情報貧困者だとして同定される人々は、自身が、自身を助けるかもしれないあらゆる情報源を欠いた状態にある、と認識している。
- (2) 情報貧困は、部分的には社会的階層の区別と結びついている。つまり、情報貧困の「条件」は、[情報貧困の状態にある人々による]情報に対する特権的なアクセスの妨げとなる、[他の階層に所属する]アウトサイダーによって影響される。
- (3) 情報貧困は、社会的規範に応じて行われる自己防衛的行動によって生み出される。
- (4) 秘密と嘘は、有用な情報を提供することについての、他者が持つ関心や能力に対する不信感から帰結する、自己防衛のメカニズムである。
- (5) 自身の本当の問題を暴露するという、危険を冒すことになる判断は、多くの場合なされない。なぜなら、そうすることが、それによってもたらされる利益を上回るような負の結果をもたらす、という認識があるためである。
- (6) 貧者の情報世界に対し新しい知識は、その世界に選択的に取り入れられる。このプロセスに影響する条件とは、日常的問題や関心に対応した情報のレリヴェンスである⁷⁾ [p.197-198.] (引用個所の [] 内は筆者加筆)³⁹⁾。

情報貧困の理論は、理論形成期第2期にも用いられたインサイダー・アウトサイダーという概念装置を用いて提示されている。簡単に振り返れば、インサイダーとはある人が所属する対人関係・対人ネットワークの内部者のことであり、ア

ウトサイダーとは外部者のことだった。

命題(1)~(3)は、情報貧困がどのような現象か、ということを表している。命題(1)は、情報貧困者の認識を表している。この命題には、単に情報源自体がない、というのではなく、むしろ、所属する対人関係・対人ネットワークとの関わりで、現実的に利用できる情報源がないということが意味されている。

命題(2)は、情報貧困の状態にある人は、所属集団の外側にいる人々、つまりアウトサイダーに対して積極的にアクセスしないということを示している。インサイダー・アウトサイダーの境界には、部分的に社会的階層が関係するということが述べられる。

命題(3)は、情報貧困が、情報貧困者の自己防衛の帰結として形づくられることを示している。

命題(4)~(6)は、上に描かれた情報貧困を形づく自己防衛プロセスがどのようなものか、ということを表している。命題(4)は、自己防衛が、実際には秘密や嘘という行為によって遂行されること、自己防衛はインサイダーを含む他者に対する不信感から帰結することが示されている。また、命題(5)は、他者に対する不信感が、具体的には、他者に情報を開示することの不利益が利益を上回るという認識であることが述べられる。

命題(6)には、情報貧困者が、アウトサイダーに対して積極的にアクセスせず、さらに、インサイダーを含む他者に接するときには、状況的レリヴェンスに応じて情報探索・利用を行うことが述べられている。

d. まとめ

情報貧困の理論では、情報貧困の状態がどのような人々の行為・行動を通じて形成されるのか、ということが示されている。すでに、田村が、次のように整理している。

チャットマンは、情報貧困層について、自らをアウトサイダーとしてみなしているような存在、他の集団の周縁にいる存在と規定する。他の集団との情報の共有が難しい存在、しかも、自らを「インサイダー」として規定

したときには、情報を共有すべき仲間が見当たらなかったり、あるいは、決定的に重要な情報については、集団内の他人とは互いにアウトサイダーであるかのような関係に立ってしまうといった、情報共有に関して一種の機能不全状態にある存在である¹⁰⁾ [p. 212-213]。

情報貧困の状態にある人が、「他の集団との情報の共有が難しい存在」だということは、過去の研究でも示されている。たとえば、用務員研究③では、用務員が他の集団を敵対的に見るために、他の集団を情報源として見なしていないという知見が導かれている。このことは、情報貧困の一つの要因である。

ただし、この理論の核心は、“自らを「インサイダー」として規定したとき”¹⁰⁾ [p. 212] の説明にあるとみることができる。「情報を共有すべき仲間が見当たらない」というのは、自己防衛と情報の状況的レリヴァンスを天秤にかけて、情報を共有する（意図的であるかそうであるかを問わず、他者に情報を観察可能にする）ことのリスクが高いと判断された場合である。「決定的に重要な情報」は、嘘や秘密を通じて他者に知られないようにする。そのようにして、「集団内の他人とは互いにアウトサイダーであるかのような関係に立ってしまう」のである。

対人関係・対人ネットワークやそこでの各人の立場の維持と情報探索・利用の相互反映性が結果的に情報貧困の要因となっているという知見は、「通常の」対人関係・対人ネットワークがあれば情報は共有されるという前提に立てば見いだされなかったことであった（IV章C節参照）。Chatman は、情報貧困の理論を通じて、対人関係・対人ネットワークやそこにおける自らの立場の維持と情報探索・利用の相互反映性の一つの事態（情報貧困）を具体的に描いたのである。

また、理論形成期第2期で見いだされたレリヴァンス・レリヴァンス判断が、状況的レリヴァンスという概念に発展されている。この発展は、情報のレリヴァンスの判断が、その場その場での自己防衛上の判断に基づいてなされているという

ことを強調するために行われたのだと解釈できる。また、レリヴァンス判断の内容自体、広がっているように見える。理論形成期第2期（III章）では、レリヴァンス判断は、世界観に照らし合わせてなされていた。情報貧困の理論では、さらに、社会的適切性という局面が強調されるようになっていく。

続く論文では、貧困者の情報探索・利用についての検討が、より詳細に展開されることとなる。

2. 囲われた生活の理論

本項で扱う囲われた生活の理論の提出に先立って、新たに、Neuse City（匿名化された後の都市名である）の女性用最高警備刑務所 (maximum security prison) でのフィールドワークが行われている。このフィールドワークは、「社会的規範」と「自己防衛的行動」について探究するためになされている⁶⁾ [p. 7]。

Garden Tower 研究で示されたように（主にIV章B節2項a目参照）、対人関係の中で逸脱してみえるのを避けることを念頭に行われる自己防衛的行動（情報探索・利用もその一種である）は、社会的規範とかかわっている。この点から、彼女が、自己防衛的行動と社会的規範をかかわらせた検討により、情報貧困の理論で一部描いた貧困者の情報探索・利用についての理解をより範囲を広げて提示しようとしていると解釈することに問題はないだろう。実際に、この検討では、理論形成期第2期の研究で言及された世界観等、情報貧困の理論に比してより広い範囲の社会についての概念が言及されている。

Chatman が刑務所を研究対象として選んだ理由は、上記の研究の焦点を集中的に検討するうえで、社会的規範に確実に焦点が当たる場所である刑務所⁴⁰⁾を題材とするのが適当だと彼女が判断した、ということだろう。刑務所の収監者には、そこでの社会的規範の徹底的な遵守が求められるためである。かつ、収監者は、文字通り社会から隔離されているのだから、貧困者をマージナルな存在という意味で見ればその一つの極致となる存在である。フィールドワークの具体的内容

は、以下の検討の中で、必要に応じて参照する。

a. 説明対象

Chatman は、刑務所の生活を「囲われた生活」と呼び、説明対象としている。

囲われた生活は、“多大な不正確さとともにある生活であり、驚くべきことに [情報ニーズが解決されるべきものとする情報利用研究の認識とは異なるが] (surprisingly), 許容されるレベルの不確実性 (accepted levels of uncertainty) を受け入れながら営まれる生活である”とされている。また、“生活は、実際に、私たちのほとんどにとって、惰性的なもの (business as usual) である。それは、几帳面なものではなく、十分であればそれでよい”とも述べられている²⁶⁾ [p. 211] ([] 内は筆者加筆)。これらの表現は、あえて情報ニーズを解決しない生活、世界の外部で起こることを細かく気かけない生活のことを意味している。

b. 中心的概念

理論の中心的概念は、次の四つである。Chatman の論述²⁶⁾ [p. 213-214] をもとに整理する。

i. 小さな世界

小さな世界とは、“メンバー相互の意見や関心がメンバーによって互いに反映される社会”であり、“そこでの言語や慣習が、ある世界観へと世界の参加者をまとめる世界”²⁶⁾ [p. 213] だと定義されている。また、“社会的現実を共有する、似たような考えを持つ個人たちからなるコミュニティ”²⁶⁾ [p. 213] とも定義されている。

小さな世界に属する個人は、いずれも、そのコミュニティで利用可能な知的・物理的資源を知っており、それらに容易にアクセス可能だとされている。また、「誰が中心的人物で誰がそうではないか」「どの考えが重要な (relevant) もので、どの考えが瑣末なものか」「誰が信頼の置ける人で、誰が信頼の置けない人か」ということについての、集合的認識がある、とされている²⁶⁾ [p. 213]。

上記の Chatman 自身の説明は、多様な側面に同時に言及しており、やや漠然としている。ここでは、上記の彼女による説明を元に、小さな世界は、同じような世界観を持ち、同じようなコミュ

ニティにおける資源を利用できるし同時にそれに制約もされる人々からなるコミュニティだと解釈しておく。

ii. 社会的規範

“ある小さな世界の中で起こる慣習的なパターン”²⁶⁾ [p. 213] と定義されている。社会的規範は、そのパターンの大小のセットであり、決まり事の個々は「コード」と呼ばれている。ある小さな世界のメンバーは、社会的規範に照らし合わせる形で互いの行為・行動の適切性を判断する。

規範はすべて明文化されているわけではなく、存在するものとされている (implicit) こともある。小さな世界への新参者は、明文化されてはいないが存在するものとされているものも含めた規範・コードを学ぶ必要がある。

iii. 世界観

“ある世界の中に暮らす人々によってもたれた、信念の一つの集合的セット”²⁶⁾ [p. 213] である。筆者なりに言い換えるならば、ある生活、ないし情報世界にどのような事物 (例: メンバーは誰か、どのような社会的規範があるか) が含まれ、そこではどのように生活すべきとされているか、といったことについての人々の認識である。

世界観は、個人が持つものであると同時に、小さな世界のメンバーの間である程度同様の形で共有されているものでもある。だからこそ、各メンバーはその世界観に沿って生活すると同時に、生活世界で何が起こりそうかということを予測することができる。

iv. 社会的類型

ある人を“彼または彼女たちの世界の他のメンバーから区別するような特質・特性”²⁶⁾ [p. 214] を表す諸類型である。これは、他者理解の基準として用いられる。人々は、自らと同じ類型に属すると判断できる他者に情報を明らかにしたり渡したりする。一方で、そうではない他者には、そうしない。

c. 命題

命題は次のとおりである。

- (1) 小さな世界を [当人たちが] 概念化することは、囲われた生活の上で重要である。なぜな

ら、それは、行動の境界線を作り出すその世界の中での信用された (legitimized) 他者 (主に「インサイダー」) を識別する (establish) ことだからである。

- (2) 社会的規範は、私的な [個々人の] 行動を、公的な [相互の] 監視の下に制約する。この公的な領域の中において、行動 (情報探索行動も含まれる) が適切か否かが判断される。
- (3) 適切な行動を確立することは、ある世界観の形成を導く。この世界観は、言語・価値・意味・シンボル、そして、世界観をその時点の境界線 (temporal boundaries) の中にとどめる文脈を含む。
- (4) 私たちのほとんどは、世界観に沿った形で、囲われた生活を実現する。その生活とは、基本的には、当たり前とみなされている世界である。ほとんどの場合、世界観は十分な予想力を持ち、重大な問題がもちあがるまでは、情報を探索することにはならない。
- (5) 囲われた世界での生活を送るメンバーは、情報を探す際に、その世界を出て行こうとはしないだろう。
- (6) 情報を探索するために世界を出ることが行われるだろう場合は、次の場合である。①情報が重大だと判断されたとき、②情報が適切であるという集合的な期待がある場合、③生きられている周囲の当たりの生活が、もはや機能していないということが認識されたとき²⁶⁾ [p. 214] (引用個所の [] 内は筆者加筆)。

以下、順に説明する。命題 (1) は、囲われた生活を送る上で、小さな世界のメンバー自身が、その世界がどのようなものであるかの理解が重要であると述べている。なぜなら、このことにより、行動する際の準拠枠とできる他者 (信用された他者) を知ることができるためである。

行動する際の準拠枠となる他者とは、特に「インサイダー」を指している。ここでのインサイダーとは、ある集団の内側の人間という意味から進んで、コミュニティの常連 (regular) となった者という意味で用いられている。インサイダーた

ちは、小さな世界で何をすべきか、何を秘密にするべきか、何が重要かということをよく理解している。新しくコミュニティに入ってきた (入所した) 者は、インサイダーを手本として、そこで生き方を学ぶ²⁶⁾ [p. 212]。

命題 (2) は、ある個人の行動の適切性が、他者により、社会的規範に照らし合わせて判断されるということを示している。この行動には、情報探索行動も含まれている。

命題 (3) は、ある人が、小さな世界における適切な行動を繰り返すうちに、そのコミュニティにおける世界観を習得することを表している。この点について、Chatman は、薬物あるいは飲酒習慣を持って入所した者の事例を出している。その入所者は、当初は薬物摂取文化に染まっている。しかし、刑務所に適切とされる行動をとるうちに、逸脱行動 (薬物摂取) から更生することになる。そしてまた、そのように更生することが、刑務所から出ることに繋がっているのである²⁶⁾ [p. 213]。直接には述べられていないが、命題 (1) と関連して、ある人は、世界観の習得により、次第にコミュニティのインサイダーとなっていくと解釈できる。

続いて、上記の世界観は、言語・価値・意味・シンボル、その運用の枠となる空間・時間的文脈の認識を含むことが示されている。「枠となる」というのは、一つにはあらゆる行為・行動が空間・時間的文脈の制約下で行われるということを示している。また、空間・時間的文脈は、それ自体、ある行為・行動の遂行や現象理解にあたっての材料となるということも意味されている。たとえば、医者が刑務所の外部にあり、週末は勤務日ではないため診療を受けられないことについての収監者の語りが例として挙げられている。ここでは収監者たちが、週末に医者による診療を受けられないことを、空間・時間と関連づけて理解していることが示されている²⁶⁾ [p. 210]。

命題 (4) では、まず、囲われた生活が、そのコミュニティで共有されている世界観に沿って営まれていることが示される。そのため、囲われた生活は、通常「当たりの生活」、すなわち、問題

の起こっていない生活として構成される、と述べられる。続いて、世界観に沿って囲われた生活が行われているのだから、世界観から外れる事態は通常は起こらず、情報が探索されることにはならない、と述べられる。

命題(5)と命題(6)では、この見解が敷衍されている。命題(5)では、囲われた生活が当たり前のもので営まれている限り、人々は、その囲われた生活の範囲を超えて情報を探索しようとはしないだろうということが述べられている。たとえば、受刑者は刑務所外部の状況を知ろうとしないし、知りたいとも思っていない。ある受刑者は、電話で家族から家族が病気であるという情報を受け取り、ひどく落ち込んだ。家族が病気であるということを知ったとしても、刑務所の中ではどうすることもできずただ悲しむしかないのです、そのような情報など正直いってほしくはなかったのである。つまり、手が届かない外界の情報を得ようとするよりは、目の前にある囲われた刑務所での生活を粛々と送ることのほうが、受刑者たちにとって負担の少ない生き方である²⁶⁾ [p. 214-215]。

命題(6)では、個々人が情報を探索するとすれば、それは、「①情報が重大だと判断されたとき、②情報が適切であるという集合的な期待がある場合、③生きられている周囲の当たりの生活が、もはや機能していないということが認識されたとき」だろう、と述べられている。この命題は、他の命題の内容を元に考えだされた命題である。このことは、直後のまとめの部分で議論する。

d. まとめ

Chatmanは、上記命題の提示後、次のように議論を総括している。この議論は、この理論により描き出されたことを非常によく示している。

私の主張として、囲われた生活は、日常的な目的のためには、情報探索について一つのネガティブな効果を持つ。この論文を通じて、私が指摘してきたように、このことには一つの単純な理由がある。人々は、そうする必要がないときには、情報を探さないのである。

ある社会的世界のメンバーが情報を無視することを選ぶのは、彼または彼女たちの世界は、それなしでも機能しているからである。更に、私が、ある特定の種類の情報、つまり、ある特定の社会的文脈の中での個々人のニーズに対応するようなものについて議論している、ということも付け加えておくべきだろう。つまり、問題に対するニーズに対応すべく探索される情報は、日々のカジュアルな利用をされる情報とは異なる種類の情報なのである。このことを踏まえて、私は、この想定が維持されない条件も作り出した。そのために、情報探索戦術が取られる事態を許容する最後の命題を提示する必要があったのである。

条件的命題を作り出す中で、私は、ある社会的世界のメンバーにとって、情報探索プロセスが始まる前にある、彼または彼女たちの情報世界の一つの段階を認識できるようにした。研究者たちは、しばしば、人々が能動的に心配事の解決を目指すことに従事している時の情報世界を初めから研究対象とする²⁶⁾ [p. 214]。

引用個所の論点は2点ある。1点は、囲われた生活の理論における生活と情報探索・利用のとりえ方であり、もう1点は研究対象の生活の性質とそれが提示された理論に及ぼした影響である。

1点目は、「私の主張として～それなしでも機能しているからである。」の部分、そして、「条件的命題を作り出す中で」から始まる段落で論じられている。ここで主張されていることは、当たりの前の、問題のない生活が維持されることが先にあって、その中で特に必要になったときにのみ情報が探索・利用される、ということである。このこと自体は、多くの研究者が認識していることであろう。

反面、「人々が能動的に心配事の解決を目指すことに従事している時の情報世界」から分析が始まると、それに先立って構成されている当たりの前の、問題のない生活（「情報探索プロセスが始ま

る前)にある、彼または彼女たちの情報世界の一つの段階)が十分に扱われない。そのため、囲われた生活の理論では、当たり前前の生活の構成を出発点に、その中で情報探索・利用がなされるのはどのような場合か、ということが描き出された。言い換えれば、初めから情報探索・利用が行われている状況を分析するのではなく、まず、当たり前前の、問題のない生活を描き出してからその一側面として情報探索・利用が行われる状況を扱う、という認識論・方法論がとられている。

つまり、ここでなされているのは、社会と情報探索・利用の関係性のとらえ方の転換であると理解できる。

念のため強調すべきは、Chatman は、情報探索(およびそれを研究対象とする研究)自体の意義を否定しているのでは全くない、ということである。むしろ、情報探索をみる際の認識論・方法論が見直されている。

もう1点は、「更に、私が、ある特定の種類の情報～情報探索戦略が取られる事態を許容する最後の命題を提示する必要があったのである」までの部分である。ここでは、囲われた生活の理論では、実際に情報探索が行われる場合を十分に描き出せていない、との Chatman の自覚が示されていると解釈できる。なぜなら、刑務所の生活では、そもそも情報探索をするということがあまりないのである。たとえば、研究者の生活には、情報探索をするということがほとんどルーチンのような形で組み込まれているが、刑務所の生活はそのような生活ではない。逆に、情報探索をする羽目にならないように、粛々と生活を送ることが優先されずらす生活である。刑務所での生活を研究対象としたことで、彼女は、当たり前前の、問題のない生活をたいへんよく扱えた反面で、情報探索が行われる場面についてはあまり追究できなかった。そのため、情報探索が行われる場合を扱う命題(6)は、彼女自身の常識的理解をもとに構成された。

上記引用箇所では、以上の内容が述べられていると、筆者は解釈する。

次項で扱う「規範的行動の理論」では、囲われ

た生活の理論に示された情報探索・利用理解がより整理されて示される。

3. 規範的行動の理論

a. 説明対象

説明対象は、「規範的行動」、つまり、“ある社会的世界の住人に、特定の文脈に応じて、最も適切と見なされる行動”⁶⁾ [p.13]である。情報探索・利用も、規範的行動の一種としてみなされている。

b. 中心的概念

論文の表題²⁸⁾自体に表れているように、生活世界を小さな世界とみなす視点は、この理論の前提となっている。そのうえで、「社会的規範」「世界観」「社会的類型」「情報行動」の四つが中心的概念として示されている。このうち、前の三つの概念は、囲われた生活の理論と共通する。

「情報行動」とは、“ある人が、入手可能な、あるいは既に手に入れた情報に関連して行為した、あるいは、行為しない状態”²⁸⁾ [p.537]と定義されている。

c. 命題

次の命題が提示されている。

- (1) 社会的規範とは、社会的世界の構成員が公的な場で望ましいとされる行動をとるために従う規準である。
- (2) 構成員は、[社会的規範の] 遵守を選ぶ。なぜなら、[社会的規範を] 遵守することが、今、この文脈において何が規範的かということに主張するための方法を与えてくれるためである。
- (3) 世界観は、どのように構成員が世界の方法[世界で過ごすための方法]を考るかということに影響を与える規範的価値によって構成される。それは、どのような出来事に対応し、何を無視するかということについて構成員に気づかせる、集合的で、当たり前ものとして捉えられている態度である。
- (4) 社会的世界の構成員は行動に影響を与えるのに十分な注意あるいは関心を持ち続ける、という信念を、日々の現実には内包している。

人々を、より低い、あるいはより高い質の理想的なカテゴリに位置づけるプロセスが、社会的類型化として考えられる。

- (5) 人間の情報行動は、それによって、日常的現実や、その現実が情報の所有を行ったり回避したりする行為へ及ぼす影響にアプローチするための、一つの構築物である。適切な行為の進め方についての判断は、どのような構成員の信念が、規範的な生活の方法を支持するために必要とされているかということに拠る²⁸⁾ [p. 538] (引用個所の [] 内は筆者加筆)。

以下に、順に説明する。命題(1)は、社会的規範が行為・行動の適切性の判断に用いられていることを示している。

命題(2)は、人々が、社会的規範の遵守を選択すること、そして、その行為・行動により、人々がその時点で自らが適切な、あるいは正当なものであることを主張しているということを示している。

命題(3)では、次のことが述べられている。まず、世界観が規範的価値により構成されることである。これは、社会的規範に沿った適切な生活を行ううえで「どのような出来事に対応し、何を無視するか」ということが、人々が世界をどのようにとらえるかということの中心軸となっていることを示す。この世界観は、人々の実際の生活の仕方に影響を与えている。また、この世界観は、人々に共有されており(「集合的」)、世界観に示されている生活態度が「当たり前のもの」としてとらえられている。

命題(4)では、まず、人々が一定の注意や関心に沿って行動している、と通常はみなされるということを示している。言い換えれば、ある人の行為・行動は、他者から、偶然になされたものではなく、一定の意図を示すものと通常はみなされる、ということを示している。

続いて、社会的類型化の議論がなされている。次の一般的な例によって考えてみたい。X氏とY氏が待ち合わせをしているとする。X氏は定刻までに着いた。Y氏は15分遅れた。この場

合、X氏の行為・行動は、時間に間に合おうとする意図に応じてとられたものと通常はみなされる。反面、Y氏は遅刻したため、Y氏に時間に間に合おうとする意図はなかったと通常はみなされる。X氏は、Y氏を、「時間にルーズな人」という類型によってみることとなる。続いて、Y氏による釈明などがなされることだろう。これは、非常に単純化された例であるが、ある人の行為・行動をもとに、ある社会的類型にある人を当てはめるプロセスの一例としてみなしうるものである。ここから、待ち合わせという生活の些細な出来事にも、規範(時間を守るべきとされていること)や社会的類型化(時間にルーズな人)、望まぬ類型化をされないように正当性を主張すること(釈明)がかかわっていることが理解できる。Chatmanは、命題(4)において、上記のようなプロセスを論じているのだと解釈できる。

命題(5)について、筆者は次のように解釈する。人々は、日常生活の有り様との関係の下で、情報を所有する事態、回避する事態をさまざまに考慮したうえで、実際の情報行動を構築する。どのように行為を起こすかということの判断は、規範的に行われている生活を維持するためにどのようなことが必要とされているかということについての、人々の考えによる。

d. まとめ

規範的行動の理論では、囲われた生活の理論で描かれた当たり前の、問題のない生活が再度整理し直されている。両理論で扱われている対象に変わりはない。ただし、それを描く際の視点が異なるようにみえる。

囲われた生活の理論では、個々人からみて、生活の維持のためにどのように行為・行動するか、適応するためにどのように学ぶのかという視点から、当たり前の、問題のない生活が眺められているようにみえる。これを行為者の視点と呼んでおく。そのため、たとえば、個人が囲われた生活にどのように適応していくのか、とか、どのように維持していくのか、ということに焦点が当たる一方で、当たり前の、問題のない生活が全体としてどのような状態にあるのか、あるいはどのよ

うに構成されているのかということは、ややみえづらくなる傾向があった。

規範的行動の理論では、当たり前の、問題のない生活の全体構成が、俯瞰的な視野から述べ直されたのだと考える。これを俯瞰者の視点と呼ぶこととする。

規範的行動の理論では、「相互主観性」という概念が、Schutz と Luckmann の議論を引きながら、説明に導入されている。この概念は、小さな世界は、私的な意味づけによって維持されている世界ではなく、他者と意味を共有しながら維持されている世界である、ということを表す²⁸⁾ [p. 537]。この概念を援用するならば、囲われた生活の理論は相互主観性を行為者の視点から論じており、規範的行動の理論は相互主観性を俯瞰者の視点から論じているのだと説明できる。このことにより、社会学的基礎概念（社会的規範など）と情報探索・利用の関係性の体系的な整理を行ったということが、彼女の貢献といえるだろう。

4. 理論提示期の議論の進展

規範的行動の理論までの理論提示期の議論は、次のように進展した。情報貧困の理論では、対人関係・対人ネットワークやそこにおける自らの立場の維持と情報探索・利用の相互反映性の一つの事態（情報貧困）が具体的に描かれた。

続く囲われた生活の理論では、情報貧困の論文で検討された内容が、より広い視野から発展された。その結果、初めから情報探索・利用が行われている状況を分析するのではなく、まず、当たり前の、問題のない生活を描き出してからその一側面として情報探索・利用が行われる状況を扱う、という認識論・方法論がとられるに至った。つまり、社会と情報探索・利用の関係性のとらえ方の転換が行われた。

最後の理論である規範的行動の理論では、囲われた生活の理論で行為者の観点から描かれた相互主観性が、改めて俯瞰者の視点から描かれた。このことにより、社会学的基礎概念（社会的規範など）と情報探索・利用の関係性の体系的な整理が行われている。

結果として、規範的行動の理論は、理論提示期の議論の Chatman によるひとまずの総括という性質を持っている。そこで、次節では、規範的行動の理論の内容を軸として理論提示期の議論を統合的に解釈しながら、理論提示期の情報世界を示す。このことにより、彼女の情報探索・利用理解の内容を深く理解することができると考える。

C. 理論提示期の情報世界

理論提示期の情報世界は、次に述べる要素、内容を持つ（第5図）。前章までと同様に、論拠を示した方がわかりやすいと判断した部分について、[] 括弧を用いて文中引用を行う。

1. 小さな世界

小さな世界は、即時的満足の理論（III章参照）でも利用された概念である。即時的満足の理論では低階層の人々が住む世界というとらえ方がされていたが、囲われた生活の理論では、「同じような世界観を持ち、同じようなコミュニティにおける資源を利用できるし同時にそれに制約もされる人々からなるコミュニティ」[B節2項b目i] という形に概念内容が変化している。この概念は、規範的行動の理論では前提とされており、その世界が俯瞰者の視点から説明されることとなった。

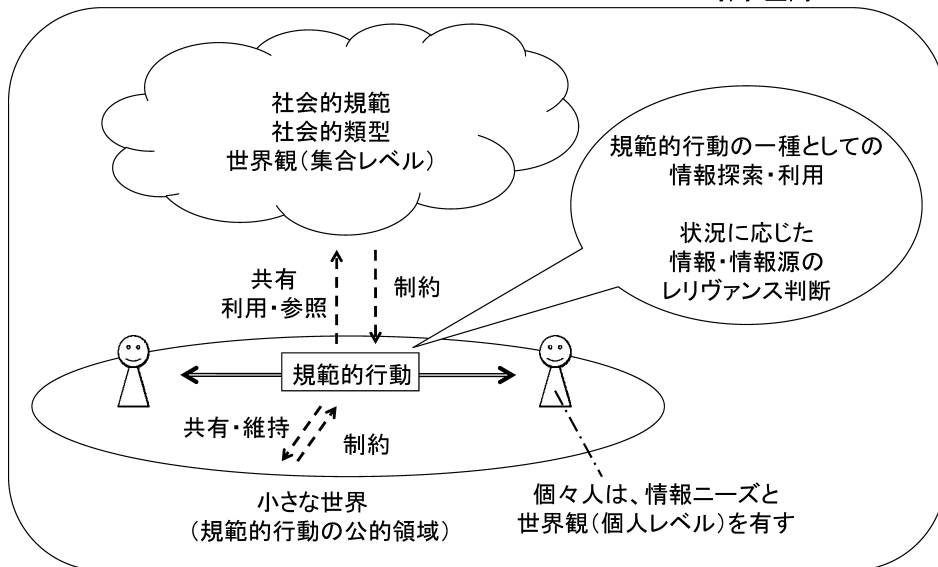
この小さな世界が、次に述べる社会的規範とそれに照らし合わせた適切性の判断の際の公的領域 [B節2項c目] となる。

2. 社会的規範

小さな世界では、適切に行為・行動しなければならない。その適切性の判断は、社会的規範に照らし合わせて行われる。社会的規範は、囲われた生活の理論と規範的行動の理論では中心的概念として扱われ、情報貧困の理論でも自己防衛概念の利用を介して参照されている。

3. 社会的類型

小さな世界の人々は、社会的類型を共有している。そして、他者をこの類型に当てはめて理解する [B節3項c目]。



第5図 理論提示期の情報世界

4. 世界観（集合レベル）

世界観概念は、即時的満足の理論でも用いられていた。小さな世界のとらえ方の変化や社会的規範の重視に従って、世界観概念もより詳細に示されている。具体的には、世界観は規範的価値により構成されるとされている。これは、社会的規範に沿った適切な生活を行ううえで「どのような出来事に対応し、何を無視するか」ということが、人々が世界をどのようにとらえるかということの中心軸となっている、ということを目指す [B 節 3 項 c 目]。

世界観は、言語・価値・意味・シンボル、その運用の枠となる空間・時間的文脈の認識を含む [B 節 2 項 c 目]。これには、上記の社会的規範や社会的類型の認識が含まれている。

世界観は、人々に共有されており、世界観に示されている生活態度が当たり前のものとしてとらえられている [B 節 3 項 c 目]。また、個人も、共有されている世界観に触れることを通じて、自らの世界観を形成する [B 節 2 項 c 目]。

5. 個々人

小さな世界は、個々人により維持されている。

6. 情報ニーズと世界観（個人レベル）

提示された理論は社会的規範に焦点を当てているため、情報ニーズの局面は詳しく論じられていない。しかし、自己防衛とは欲しい情報（情報ニーズ）とその情報を実際に手に入れること、ないし手に入れようとすることの利益・不利益を天秤にかけることであるから、個々人が情報ニーズを有しているとみなされていることがわかる [IV 章 B 節 2 項 c]。また、困われた生活の理論では、個々人が世界観を有することが論じられている [B 節 2 項 c 目]。

7. 規範的行動（小さな世界の維持、自己防衛）

人々は世界観を共有しているため、社会的規範に沿った形で行為・行動する。このことにより、小さな世界は、当たり前の、問題のない生活として営まれる。

8. 規範的行動の一種としての情報探索・利用、状況に応じたレリヴァンス判断

情報探索・利用は、規範的行動の一種である [B 節 3 項 c 目]。情報・情報源を探索・利用するかという判断（レリヴァンス判断）は、状況に応

じて行われる。

情報探索・利用は、一つには情報が欲しいか否かということ（情報ニーズ）にかかわっている。さらに、ある情報・情報源が社会的規範などと取らし合わせて現実的に利用可能か否か、ということの判断もなされている。このようなレリヴァンス判断理解は、即時的満足の理論のときより深化したものである [B 節 1 項 c 目]。状況的レリヴァンスの観点からみた情報の類型も、Garden Tower 研究で論じられた [IV 章 B 節 2 項 b]。

小さな世界に生きる者は、規範的に行動し続けることを期待されている。そこから外れることが逸脱行動とされる。逸脱者としてみなされないために、人々は嘘や秘密を駆使することによって自己防衛する。その帰結として、本当に手に入れた情報が入らないという情報貧困の状態に陥る。このように、情報貧困の理論で示された、対人関係・対人ネットワーク（あるいは小さな世界）と情報探索・利用の相互反映性の一つの事象は、規範的行動のいわば負の側面を示したものであることが分かる。

9. 時間・空間

2通りの意味で言及されている。まず、生活は、時間・空間の制約の下で営まれる [B 節 2 項 c 目]。また、情報探索・利用、そして状況に応じたレリヴァンス判断は、ある時点の状況と照らし合わせて行われる [B 節 1 項 c 目]。

規範的行動を軸として、三つの理論を統合的に解釈することで、以上のように理論提示期の情報世界を整理することができた。

I 章に触れたが、Courtright は、情報利用研究者の文脈理解を「客観的文脈」「個人の内部で構築される文脈」「社会的に構築された文脈」「関係論的文脈」「変化する文脈」の五つに類型化した¹¹⁾。Courtright は、三つ目の「社会的に構築された文脈」類型の中でのみ、Chatman を引用している。しかし、Courtright の類型に照らし合わせてみると、Chatman の視点はより広い範囲を含んでいたのではないかと筆者は考える。この考えをここで論じることは、上記の整理を補足

することになるだろう。

「客観的文脈」として文脈を理解する研究において、文脈とは、情報探索・利用がその中で行われる容器、つまり、その中での人々の活動とは独立に概念化される、静態的で、正確に輪郭を描かれる (delineated) セットの実態だとみなされる。このような研究において、文脈は研究の背景として位置づけられるにすぎない。そのため、研究成果においては、情報探索・利用にのみ焦点が当たり、情報探索・利用と文脈の関係の実際は登場しないこととなる¹¹⁾ [p. 286-287]。

しかし、「個人の内部で構築される文脈」として文脈を理解する研究では、情報探索・利用と文脈の関係が重視される。この視点は、情報探索・利用者個々人が周囲の事物について構築する意味を、個々人の情報探索・利用の文脈ととらえる。そして、その文脈がどのような要素により構成され、情報探索・利用に影響を与える変数となっているか、ということに焦点を当てる¹¹⁾ [p. 287-288]。

さらに、「社会的に構築された文脈」として文脈を理解する研究においては、行為者が社会的行為者であること、個々人が単独で意味を構築するというよりも他者との相互行為の中で意味を構築することが重視されるようになる。情報探索・利用の文脈が、構築された意味だとみなされることは「個人の内部で構成される文脈」の視点と同様である。しかし、その文脈・意味は、個々人が内化している、個々人が所属する社会的コミュニティにおいてすでに構築・共有されている知識・特徴・期待・規範と照らし合わせて構築される。つまり、上記の知識などは、情報探索・利用に影響する単なる一変数であることを超えて、個々人による意味構築、および、情報探索・利用の文脈を社会的なものとするものでもあるのである¹¹⁾ [p. 288-289]。

「社会的に構築された文脈」までの文脈観において、文脈は情報探索・利用に影響を与えるものだととらえられている。一方で、情報探索・利用者が周囲の事物を形成してもいるという側面は、言及されない。「関係論的文脈」「変化する文脈」

という視点は、「社会的に構築された文脈」の視点を踏まえながら、さらに上記の側面を重視する。「関係論的文脈」・「変化する文脈」という視点においては、情報探索・利用者は、意味構築の対象である周囲の事物間の関係性自体の中に埋め込まれているとみなされる。そのため、周囲の事物およびその間の関係性は、情報探索・利用者の行為・意味構築によって変化する。つまり、文脈と情報探索・利用の間の関係は、動的 (dynamic) なものとみなされるのである¹¹⁾ [p. 289-290]。

Chatmanの研究には、社会的規範の遵守という生活の側面が強く表れている。これは、囲われた生活の理論と規範的行動の理論が刑務所のフィールドワークに基づいていること、つまりフィールドの性質が反映されていることによるものと考えられる。しかし、先に整理したように、各理論の中に人々が生活を形成・維持するという局面が描かれていることは疑いない。たとえば、規範的行動は、明らかに、周囲からの自らの見え方、対人関係を形成・維持することに言及している。そのため、Chatmanの研究は、Courtrightのいう「関係論的文脈」「変化する文脈」という文脈観をとる研究の例として理解するほうが、より適切なのではないかと考える。

田村は、情報貧困の理論を指して、社会的側面に対する議論の不足を指摘している¹⁰⁾ [p. 213]。筆者は、その後提示された規範的行動の理論において、田村が指摘した議論の不足はある程度補完されているのではないかと考える。つまり、Chatmanは、情報探索・利用と社会の関係性についてある程度確立した見解を提示していたのではないだろうか。ただし、その見解を提示した時点で、彼女は、残念ながらこの世を去ってしまった。

次節では、本節に整理した内容と情報利用研究の既往研究を対照させることにより、彼女の情報探索・利用の独自性を考察する。

D. Chatmanの情報探索・利用理解の独自性の考察

Chatmanの情報探索・利用理解の独自性はど

こにあるのだろうか。本論文では、Pettigrewらが認知的視点における情報探索・利用理解の一つの典型例として示すWilsonの情報行動モデルに示される情報探索・利用理解と、Chatmanのそれを比較することにより、このことを明らかにする。I章に述べたように、認知的視点は、パラダイム・シフト以降の情報利用研究で主流となった視点である。

Wilsonからみる。第2図のモデル (I章に挙げた) には、状況の中で情報ニーズを抱いた個人が、情報探索を行い、情報の処理・利用を行うまでのプロセスが描かれている。また、情報ニーズに対して情報探索を行うという決断を下すことを促進する要因 (活性化メカニズム) と、その決断を行う際の干渉要因も描かれている。干渉要因の状態いかんによっては、情報探索は行われない。情報探索には、四つのモードがある^{5),41)}。

ここで描かれている状況は、いわば、「個人の情報探索・利用状況」だといえる。つまり、情報探索・利用が行われる状況が、初めから検討対象とされている。この状況は、情報探索・利用の前後の社会的文脈・状況とは独立に扱われているし、情報探索・利用状況における社会的文脈は状況外部からの干渉要因として扱われる。

Chatmanの情報探索・利用理解では、状況のとらえ方が転換されている。囲われた生活の理論の部分で検討したように、彼女は、初めから情報探索・利用状況を分析単位とするのではなく、それに先立って営まれている当たり前の、問題のない生活を分析単位として、その一側面としての情報探索・利用を検討する。つまり、社会と情報探索・利用の関係性のとらえ方の転換が行われているのである。

Chatman流の情報探索・利用理解がもたらす利点、あるいは理論面の貢献は何だろうか。筆者は、相互主観性、情報探索・利用と社会の相互反映性を扱えることだと考える。これはまさに、I章に触れたVakkariや田村のいう「意味構築の共同的な側面」を扱うことに他ならないといえよう。彼女の先見性はこの点にあったといえてよい。

Wilson や Dervin を中心とした、Pettigrew らが認知的視点として論じる論者の情報探索・利用理解に共通するのは、個人の情報探索・利用状況を主題にしている点である。認知的視点には、個人の内的構造と情報探索・利用のパターンの関係が精緻に分析できるという利点があるし、それが焦点とされる。一方で、個人の意味構築を超えた複数人間の意味構築は直接の分析単位からは外れる。たとえば、会話を通じて複数人が協同して意味を構築していくような状況、それによって当たり前、問題のない生活が維持されるような状況は、この枠組みでは十分に分析できないと考えられる。

また、初めから情報探索・利用状況を分析単位とすることで、情報探索・利用が行われていない状況を分析することはできない。Chatman の主張は、むしろその情報探索・利用が行われていない当たりの、問題のない生活の理解から始めることで、かえって情報探索・利用と当たりの、問題のない生活の維持との関係、すなわち相互反映性を問うことができる、ということである。田村が Chatman の利点として述べる「Dervin の意味構成アプローチなどでは行うことのできない情報探索・利用しないことの積極的な意味づけ」ができること¹⁰⁾ [p. 214] とは、このことを指している。

たとえば、情報貧困の理論で「秘密」という現象が取り上げられた。これは、周囲から逸脱者とみなされないうまま、平常の生活を送るための、情報にかかわった手段である。このような現象を、たとえば情報探索・利用のプロセスを扱う Wilson のモデルを用いて詳細に分析することは極めて難しいように、筆者には思える。

Chatman 自身は、自身の研究について、情報貧困の理論で、以下のように述べている。

情報ニーズ・利用についての状況的アプローチ [認知的視点] については多くの支持があるが、私はこの概念について生活世界という観点から取り組みたい。(中略) 問題というもの個人レベルで始まるのかもしれない

が、ある人の個人的な探索戦術が実践的な意味をもつためには、その戦術は社会的規範の枠組みの中で眺められなくてはならない⁷⁾ [p. 203] (引用個所の下線部は筆者強調、[] 内は筆者加筆)。

そして、次の規範的行動の理論の一節は、上記引用個所の、Chatman 自身による敷衍として読める。

あらゆる所与の小さな世界において、個々人が、彼または彼女たちにとって入手可能な情報に関係して行動できる、一群の方法がある。例えば、彼または彼女たちは能動的な情報探索のプロセスをあまりにもコストがかかり、あるいは困難なものと認識するかもしれない、そしてそれを避けるかもしれない。あるいは、彼または彼女たちは、彼または彼女たちにとって入手可能な情報を重要なものとしてみなすが、それなしにやっつけられるという結論に行き着くかもしれない。あるいは、更に、彼または彼女たちは、その情報が受容できない社会類型から出てきたものだと確信し、その情報がたとえ正確なものであったとしても、それ自体を受容不可能なものだと結論づけるかもしれない。規範的行動の理論の中では、情報行動という概念は、同定できる程度の情報ニーズを持った、知性があり合理的な人々が、情報を探索するプロセスをはじめもしないかもしれない、彼または彼女たちが、必要とする情報を見つける前に探索プロセスを諦めるかもしれない、あるいは、単に受動的に情報がいつか入ってくるのを待つと決めるかもしれないことの原因を理解する方法を与えてくれる²⁸⁾ [p. 538]。

人は、情報が欲しいと思ったからといって (情報ニーズが起こったからといって)、情報を即探せるわけではない。物理的に情報源がないということを超えて、対人関係との関連で、現実的に利用可能な情報・情報源がないかもしれないし、そ

もそも情報を探ることが最善でもないかもしれない。このようなことを総合的に判断するのが、Chatman のいう「個人的な探索戦術の実践的な意味」なのであろう。このことがみえてきたのは、まさに、Chatman が情報探索・利用の分析にあたっての社会と情報探索・利用の関係性のとらえ方の転換をしていたからだ、と筆者は考える。

本章 C 節では、Chatman の提示した理論の統合的解釈を通じて、彼女の到達した情報探索・利用理解を明らかにした。また、D 節でその独自性についても考察した。彼女の情報探索・利用の独自性は、社会と情報探索・利用の関係性のとらえ方を転換している点にある。彼女の情報探索・利用理解は、相互主観性、情報探索・利用と社会の相互反映性を扱える点で理論的貢献をなしている。

社会理論の適用や、フィールドワークの採用は、それ自体が先駆的であるにしろ、根本的にはこのような知見を導きだすための考察を進めるための手段であったと理解されるべきであろう。

以上の検討をもって、二つ目の研究課題である提示された理論の統合的解釈が達成されたものとした。

次章では、三つ目の検討課題についての検討に移ることとする。

VI. Chatman の研究視点の展開の方向性

I 章に触れたように、Chatman の理論の検証への取り組みはすでに始まりつつある。そして、このことは、それ自体意義のあることだと考える。なぜなら、彼女自身は、規範的行動の理論を提示した直後に亡くなったため、彼女自身による理論の検証はほとんどなされていないためである。また、囲われた生活の理論の部分 (V 章 B 節 2 項) で述べたとおり、情報が探索される状況自体が十分に扱われたわけでもないの、理論の検証過程でこの点についての知見が付加されることは重要である。

しかし、I 章に述べたとおり、理論形成期の Chatman の研究の中で提示されている論点の中

には、提示された理論に反映されていないものがある。これらの論点は、単に理論の検証をすることでは見いだされないか、見いだされても時間がかかるかもしれない。

本章で行いたいのは、Chatman の研究視点の展開の方向性の考察、つまり、彼女の研究視点をもとに、今後取り組まれるべき課題を明らかにすることである。これは、本研究の三つ目の検討課題にあたる。

A. 分析対象の拡大：特に組織体における情報探索・利用を扱うこと

Chatman 自身は、最後まで貧困者を研究対象とし続けた。彼女の研究が貧困者への関心から始まり、その関心が最後まで維持されたことは確かである。その限りにおいて、彼女の研究は貧困者の情報探索・利用を主題としたものと表現されることとなる。

しかしながら、彼女が最終的に提示した情報探索・利用理解の内容は、必ずしも貧困者の情報探索・利用のみに範囲を限定されるものではないと考える。むしろ、情報貧困現象にしろ、囲われた生活にしろ、規範的行動にしろ、貧困者の情報探索・利用に「も」妥当するような一般性を備えた知見を提示しているのではないだろうか。

以上の理由から、分析対象を拡大して考察を進めるといふ試みは、大いにありうる展開であろう。実は、晩年の Chatman の議論にも、自らの理論をより広い範囲の社会集団に適用し、拡大しようとしていた形跡がみられる。たとえば、パーティクルコミュニティといった必ずしも貧困者とはいえない人口集団にも、理論が適用されようとしており、そのための予備的考察が提示されている²⁸⁾。もしかしたら、上記の一般性を彼女自身見だし、新たな研究を展開しようとしていたのかもしれない。

筆者は、分析対象を拡大して考察を進めるにあたって、特に、用務員研究の頃の Chatman のように、組織体における情報探索・利用を扱うことが、この論点にかかわる次の展開として有力だと考えている。なぜなら、組織体において仕事をす

る人々こそ、多大な社会的制約の下で、複雑な情報探索・利用をしていると考えられるためである⁴²⁾。

職階といった組織体における社会的類型や仕事の進め方といった社会的規範の諸側面が、そのメンバーの情報探索・利用の有りに密接にかかわってくることは十分に予想できる。また、組織体における昇進などの競争関係は、情報探索・利用の複雑性を際立たせるとも考えられる。たとえば、かなり厳密な上下関係の下で営まれる会社を想定したときに、あるメンバーが、明らかに叱責を受けることにつながりそうな情報を、上司や周囲に積極的に伝えられないことは、大いにあり得るだろう。上司は組織体における社会的類型の一種であるし、叱責を受けるのは何らかの組織体における世界観や社会的規範と照らし合わせてメンバーの仕事の状態が適切でないことを示している。上に出てくるメンバーは、このようなことを理解しているため、情報を積極的に伝えないことによって、会社における対人関係を維持しようと試みるのである。

もちろん、事実はこの例のように単純なものではなく、いろいろな事情が入り組んでいると予想されることは、いうまでもない。このような場面を扱うことで、Chatman の情報探索・利用理解に対し、人々の社会的規範や社会的類型の利用に関わる新たな知見が加わるはずである。

このようにみえてくると、分析対象を拡大すること、特に組織体における情報探索・利用の探究を行うことが、今後の取り組まれるべき課題の一つであることがわかる。

B. 知識の作成・修正プロセスの探究

Chatman の当初の研究関心は、情報の普及であった。普及された情報が、やがては集合的な知識（人々が知っていること）を形成し、広い範囲に影響を及ぼす場合があることは、マスコミュニケーション研究の知見³¹⁾からうかがうことができる。そうすると、情報普及プロセスは、知識の集合的な作成プロセスだとみることができる。

Chatman の理論において重要な概念であった

社会的規範、世界観、社会的類型は、それ自体が知識の一類型である。これらは、生活の中で維持されると同時に、作成されたり修正されたりしてはいるはずである。

Chatman の研究では、知識・生活の維持の手段としての情報探索・利用は描き出された。一方で、共有されたものとして扱われる知識がどのようにして作成されていくのか、あるいは修正されていくのかという側面について、Chatman は、（議論の見通しの中で示唆はしているものの）あまり扱っていない。たとえば、非常に一般的な例だが、学校に入学したり、誰かがクラスに転校してきたときに、お互いにあだ名をつけ合った経験は、誰にでもあつただろう。当初はいくつかのあだ名が乱立するのだが、次第に「あの子を〇〇と呼ぶ」というような相互理解が、クラスの中ででき上がっていく。クラス替えがあつたときにそのあだ名という形の相互理解が変わる（修正される）こともあるだろう。これは、社会的類型という知識の一類型が人々の間で作成・修正されていくプロセスとみることができる。彼女の提示した理論の中では、このような知識の作成・修正の側面が扱われていない。

つまり、普及理論を適用した研究に見られる視点が、理論提示期の Chatman の研究では限定的にしか展開されていない。これは、彼女がマクロなレベルの理論を適用することから、小さな世界に徐々に照準していったことの表れであろう。しかし、当初の研究関心に対して、再度異なった角度からアプローチする余地はあるはずである。

したがって、知識の作成・修正プロセスの探究が、今後取り組まれる課題の二点目だと考える。

さらに、この方向性に理論的背景を与えるものとして考えられるのが、Chatman 自身もしばしば引用する Alfred Schutz の議論である。

Schutz が、理論提示期の意味での小さな世界という生活世界のとらえ方や、相互主観性といったテーマの基礎を与える考察を行った論者であることは、すでに広く知られるとおりである。その考察の一環には、「知識の社会的配分」論⁴³⁾がある。

知識の社会的配分論の経験的展開への試みを、池谷のぞみが行っている。池谷は、Schutzが知識の社会的配分論を課題とした理由を、“生活世界における成員にとり、知識が配分されているという前提は、あらゆる行為の基盤になるものとみなした”こと、“知識が配分されるメカニズムが社会学で問題とされていない”ことの二点からまとめている⁴⁴⁾ [p. 55-57]。池谷は、Schutzのいう知識の社会的配分のメカニズムが、人々の活動の中での知識の伝達・保存・利用・修正（彼女は、これを「知識の実践的マネジメント」と呼んでいる）を通じて達成されるととらえ、このメカニズムを経験的なレベルで記述・分析するための語彙を提示している⁴⁴⁾。

C. 状況と情報探索・利用の相互関係のより詳細な探究

Chatmanの情報世界のとらえ方の中には、「状況的レリヴァンス」概念が含まれている。一方で、Chatmanは、情報のレリヴァンスが各状況下でどのように確定されるかということの実際の記述・分析を深める前に亡くなってしまった。

状況と情報探索・利用の相互関係を扱うことは、たとえば、情報貧困の理論で扱われた自己の立場の維持と社会的類型の関係をより深く扱うことにつながる。各人が社会の中で負う役割は一つではない。たとえば、ある人が、会社員であると同時に、父親であったり、友人とのサークル活動の一員であることがあるだろう。「会社員として」会社にいるときに親族の不幸の一報があり、「父親として」判断を求められたり、次の瞬間には「会社員として」早退・休暇の申請やその間の自らの仕事の調整をしなければならなくなることがあるだろう。その際、「会社員として」の情報の伝達を適切に行えない場合は、周囲から適格性を問われることにつながるし、仕事を一緒に行っているグループや部署の仕事の進捗にも影響する。このように、複数の社会的役割が、ある状況での情報探索・利用とめまぐるしく関係し合うことは、しばしば起こりうるし、それを通じて社会の中での各人の立場が構築・維持されるのである。

すべての人間の活動は、状況において始まり、行われ、終わることを考えれば、A節やB節に述べたテーマを扱う際にも、状況に目を向けることは必要となってくる。

状況を詳細に扱うことは、状況における世界観・社会的規範・社会的類型などの知識の運用や対人関係を全体論的に扱うことを意味するため、それ自体がたいへん複雑な課題となることが予想される。しかし、状況理解を深化させるためには、今後、避けて通れない道であろう。

そのため、今後取り組まれるべき課題の3点目として、状況と情報探索・利用の相互関係をより詳細に探究することを提示できる。

D. 理論構築以外の研究方法論についての示唆

Chatmanの研究視点をもとに、今後取り組まれるべき三つの課題を明らかにした。この三点を探究していくうえで、彼女のように、フィールドワークを行い、理論を提示するということは、一つの有力な方策だと考えられる。

加えて、筆者は、Chatmanの研究は、理論構築以外の研究方法論についての示唆を与えてくれると考える。それは、彼女の研究の中でたびたび問題となった「アノマリー」に改めて注目することからみえてくるものである。

理論形成期では、第1期では、情報の普及の観点からみえてきたアノマリーを通じて、情報貧困の再発見が行われた。その知見をもとに、第2期では、貧困者（用務員）の情報世界の分析の深化が行われた。分析は、第3期でさらに発展され、情報貧困、情報探索・利用のとらえ方の転換につながる発見が見いだされた。この発見は、過去の研究における対人関係・対人ネットワークに対する想定に対するアノマリーであった。このように、Chatmanは、研究においてアノマリーを有効活用している。アノマリーは、彼女の研究において、結果的に非常に大きな役割を果たしたといつてよい。

Chatmanの研究の進め方で特徴的なのは、次に取り組むべき課題を理論に対するアノマリーという形で導出しながらも、そのアノマリーを、適

用した理論の修正によって説明しようとしないうところである。むしろ、アノマリーに表される問題の性質に合わせて、それを説明するために有用と予想される理論が、その都度新たに研究に導入されている。その帰結として、Chatman の第3期までの研究の進め方は、一見、かなりアドホックにみえるものとなっている。つまり、田村が述べるように、彼女の一連の論文の中では、既存の理論に隠れて、彼女の思考が読み取りづらいものとなる傾向がみられることとなっている¹⁰⁾ [p. 212]。

しかし、彼女の研究の展開がアドホックにみえるのは、理論の発展という視点に立って彼女の研究をみたときである。理論の発展ではなく、研究対象という側面からみれば、彼女が追究したい現象は、貧困者の情報探索・利用という点で常に一貫してもいたし、一連の理論の適用とフィールドワークは、それにできるだけ詳細に接近するための手段であった。また、一連の理論に照らし合わせてアノマリーとしてみえてきた現実、現実を担っている当人たちからすればアノマリーでも何でもなく、現実そのものである。

理論を用いた研究においてアノマリーが出てくるとは、原理的に不可避である。このことは、B 節で取り上げた Schutz が焦点化していた一つの論点に関係する。その論点とは、「一次的構成概念」と「二次的構成概念」の区別である⁴³⁾。一次的構成概念とは、人々自身が意味を構築する際に参照する概念である。一方、二次的構成概念とは、研究者が対象となる人々の活動を説明する際に参照する概念である。一次的構成概念と二次的構成概念は異なるため、人々の活動と理論との間には、アノマリーが生じることとなる。

それならば、二次的構成概念を介さずに、現実を担っている当人にとっての現実を初めから扱おうとすること、つまり、初めから一次的構成概念に注目するという選択も、現実理解の手段として、原理的にはとりうる。そして、実際にその選択をして現在まで発展してきた社会学における研究方法論に、エスノメソドロジーがある。この方法論は、人々の実践を扱ううえでとりうる有用な

方法論として、最近、図書館・情報学に紹介された⁴⁵⁾。

II 章に見たとおり、Chatman がフィールドワークを選択した理由は、人々の実践を最も自然なセッティングの中調査ができるということだった。ここには、人々の実践にいかにか接近するかという研究視点が表れている。また、彼女は、最晩年の ISIC 基調講演において、「理論を用いた研究においては、人々の活動と理論が異なることに注意する必要がある」という見解を残している⁶⁾ [p. 16]。

そのため、Chatman の研究視点を展開するうえでとりうる一つの方法論的選択肢として、エスノメソドロジーを検討する余地があるといえるだろう。その際には、エスノメソドロジーが Chatman の研究を含めた過去の情報利用研究の知見とどのように関係するのか、また、エスノメソドロジーを情報利用研究に導入することで知見がどのように前進するのかということの綿密な検討が必要となることはいうまでもない。

本章では、彼女の理論に示される情報探索・利用理解と、彼女の理論形成期の研究視点を併せて考察することにより、今後取り組まれるべき3点の課題を明らかにした。1点目は、分析対象を拡大すること、特に組織体における情報探索・利用の探究を行うことである。2点目は、知識の作成・修正プロセスの探究である。3点目は、状況と情報探索・利用の相互関係をより詳細に探究することである。また、理論構築以外の研究方法論についての示唆も得られた。

これらをもって、本研究の三つ目の検討課題である Chatman の研究視点の展開の方向性の考察は達成されたと考える。この考察から、彼女の研究視点は理論に完結するものではない、ということがわかる。むしろ、理論は彼女の研究視点の中途地点（いったんの到達点）を表すものであったとみなせるのではないだろうか。そのため、彼女の理論を直接に用いて研究を行うにせよ、そうではないにせよ、彼女の研究、および研究視点を、今後の情報利用研究の中で発展的に展開する可能性は十分にあると考える。

次章では、本研究での検討を経た結論として、Chatmanの研究視点が情報利用研究に持つ意義を明らかにする。続いて、今後の課題について論じる。

VII. 結論と今後の研究課題

A. 結論

本研究では、Chatmanの研究視点が情報利用研究に持つ意義を明らかにすることを目的に、三つの検討課題に取り組んだ。一つ目の検討課題である理論形成期の研究の論点整理を、II～IV章にかけて行った。この検討により、理論形成期の研究で、情報の普及の観点から情報貧困、貧困者の情報探索・利用の再発見（第1期）、貧困者の情報世界の分析の深化（第2期）が行われ、最終的には情報貧困、貧困者の情報探索・利用のとりえ方の転換につながる発見が見いだされた（第3期）ことを論証した。各時期の情報世界も整理した。

V章では、二つ目の検討課題である提示された理論の統合的解釈を行い、Chatmanが最終的に提示した情報世界を明らかにした。続いて、その独自性を考察した。彼女の情報探索・利用理解は、社会と情報探索・利用の関係性のとりえ方の転換をしている点で独自のものである。またそれは、相互主観性、情報探索・利用と社会の相互反映性を扱える点で、理論的貢献をなしている。

三つ目の検討課題であるChatmanの研究視点の展開の方向性の考察を、VI章で行った。理論と理論形成期の議論を併せて考察することにより、3点の今後の課題を明らかにした。1点目は、分析対象の拡大、特に組織体における情報探索・利用の探究を行うことである。2点目は、知識の作成・修正プロセスの探究である。3点目は、状況と情報探索・利用の相互関係のより詳細な探究である。また、理論構築以外の研究方法論についての示唆も得られた。

以上の検討をもとに、Chatmanの研究視点が情報利用研究に持つ意義とは、情報利用研究に重要な理論的貢献をなす独自の情報探索・利用理解を提示していること、そして、理論のみならず研

究全体が今後の情報利用研究の豊かな出発点を提供していること、の2点だと結論する。

B. 今後の研究課題

最後に、本研究の検討をもとに、今後取り組まれる余地があるいくつかの研究課題を整理する。一つ目の課題は、Chatmanの研究視点を元にした、研究の展開・発展である。これについては、前章で具体的な課題を提示した。

二つ目の課題は、Chatmanの図書館サービス論者としての側面の理解である。本研究は彼女の情報探索・利用理解を焦点としたため、彼女のすべての論文を取り上げたわけではない。しかし、彼女は終生、自らの研究がいかに図書館サービスの設計・運営に貢献しうるか、という関心を持ち続けた。この関心は、III章に整理した理論形成期第2期の議論に特に直接的に見て取れるほか、最晩年のISIC基調講演の結論部でも強調されている。

彼女の研究が、Berelsonらによる公共図書館利用者調査の延長線上にとらえられるということはII章で論じた。そこでの関心である公共図書館の利用実態について、貧困者の情報探索・利用の観点からさらに詳細な調査を行ったものとして、Chatmanの研究をとらえることもできるはずである。図書館サービス論の文脈での考察は、実際にいくつかの論文^{46)～49)}でまとまって展開されている。それらの論文は、本論文の執筆にあたって参考にしたが、各章内で取り上げた諸論文に比して詳細な検討対象にできたわけではない。立ち入った検討が、今後なされることを期待したい。

三つ目の課題は、社会的視点による情報利用研究の論点整理の継続である。社会的視点による情報利用研究が増加傾向にあるものの、この視点が比較的最近登場したがゆえに論点整理が十分に進んでいないことは、I章に論じた。筆者は、Pettigrewらが社会的視点によるものとして論じた一群の研究とChatmanの研究との間に、無視できない程度の視点の違いが相互にあるとみている。そのため、継続して、社会的視点をとる研究

の論点を整理する必要があるだろう。

この整理の過程で、認知的視点と社会的視点の共通点と差異がどこにあるのかということがより明確にみえてくるはずである。また、本研究では Chatman の独自性を認知的視点との対比で論じているが、Pettigrew のレビューが提示された 2001 年前後から登場している、社会状況をとらえようとする認知的視点が Chatman の示した認識論・方法論とどのような関係にあるかということまでは論じられていない。これらの諸点を扱う整理がかえって、Pettigrew の区分自体のとらえ直しを迫る結果を示す可能性もあるのかもしれない。

いずれの課題を追究するにあたって、Chatman の研究は、今後の情報利用研究に対し貴重な知見、礎を提供してくれることを、本研究の締めくくりとして改めて指摘しておく。

謝 辞

本研究は、三田図書館・情報学会 2006 年度研究助成、日本学術振興会特別研究員として日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費、研究課題番号：08J08156）の助成を受けて、遂行したものです。両助成がなければ、本研究を含む筆者の研究遂行は困難でした。この場を借りてお礼申し上げます。

また、研究指導をいただいた慶應義塾大学文学部田村俊作教授とパロアルト研究所池谷のぞみ研究員に感謝いたします。さらに、有益なご指摘・ご示唆をくださった、査読者に感謝いたします。

注・引用文献

- 1) Dervin, B.; Nilan, M. Information needs and uses. *Annual Review of Information Science & Technology*. 1986, vol. 21, p. 3-33.
- 2) Pettigrew, K. E. et al. Conceptual frameworks in information behavior. *Annual Review of Information Science and Technology*. 2001, vol. 35, p. 43-78.
- 3) Vakkari, P. "Information seeking in context: A challenging metatheory". *Information Seeking in Context*. Vakkari, P. et al. eds. Taylor Graham, 1997, p. 451-464.
- 4) 田村俊作. "序章: 情報利用をめぐる研究". 情報探査と情報利用. 田村俊作編. 勁草書房, 2001, p. 1-39.
- 5) Wilson, T. D. Models in information behaviour research. *The Journal of Documentation*. 1999, vol. 55, no. 3, p. 249-270.
- 6) Chatman, E. A. Framing social life in theory and research. *New Review of Information Behaviour Research*. 2000, vol. 1, p. 3-17.
- 7) Chatman, E. A. The impoverished life-world of outsiders. *Journal of the American Society for Information Science*. 1996, vol. 47, no. 3, p. 193-206.
- 8) Hersberger, J. "8 Chatman's information poverty". *Theories of Information Behavior*. Fisher, K. E. et al., eds. Information Today, Inc., 2005, p. 75-78.
- 9) Fulton, C. "9 Chatman's life in the round". *Theories of Information Behavior*. Fisher, K. E. et al., eds. Information Today, Inc., 2005, p. 79-82.
- 10) 田村俊作. "第 4 章: 情報利用の社会的意義". 情報探査と情報利用. 田村俊作編. 勁草書房, 2001, p. 189-227.
- 11) Courtright, C. Context in information behavior research. *Annual Review of Information Science & Technology*. 2007, vol. 41, p. 273-306.
- 12) Bates, M. J. "Chapter 1: An introduction to metatheories, theories, and models". *Theories of Information Behavior*. Fisher, K. E. et al., eds. Information Today, Inc., 2005, p. 1-24.
- 13) Case, D. O. *Looking for information: A survey of research on information seeking, needs, and behavior*. Second Edition. Elsevier. 2007, 423p.
- 14) Burnett, G. et al. Channelling chatman: Questioning the applicability of a research legacy to today's small world realities. *Proceedings of the American Society for Information Science and Technology*. 2007, vol. 43, no. 1, doi: 10.1002/meet.1450430197. <http://www3.interscience.wiley.com/journal/116328817/abstract>, (accessed 2009-06-12).
- 15) Solomon, P. "Information mosaics: patterns of action that structure". *Exploring the contexts of information behaviour*. Wilson, T. D.; Allen, D. K. eds. Taylor Graham, 1999, p. 150-175.
- 16) Chatman, E. A. *The diffusion of information among the working poor*. University of California, Berkeley, 1983, Ph.D. thesis.
- 17) Chatman, E. A. *Field research: methodological themes*. *Library & Information Science Research*. 1984, vol. 6, no. 4, p. 425-438.
- 18) Chatman, E. A. *Information, mass media use and*

- the working poor. *Library & Information Science Research*. 1985, vol. 7, no. 2, p. 97-114.
- 19) Chatman, E. A. Diffusion theory: A review and test of a conceptual model in information diffusion. *Journal of the American Society for Information Science*. 1986, vol. 37, no. 6, p. 377-386.
 - 20) Chatman, E. A. Opinion leadership, poverty, and information sharing. *RQ*. 1987, vol. 26, no. 3, p. 341-353.
 - 21) Chatman, E. A. The information world of low-skilled workers. *Library & Information Science Research*. 1987, vol. 9, no. 4, p. 265-284.
 - 22) Chatman, E. A. Alienation theory: Application of a conceptual framework to a study of information among janitors. *RQ*. 1990, vol. 29, no. 3, p. 355-368.
 - 23) Chatman, E. A. Life in a small world: Applicability of gratification theory to information-seeking behavior. *Journal of the American Society for Information Science*. 1991, vol. 42, no. 6, p. 438-449.
 - 24) Chatman, E. A. Channels to a larger social world: Older women staying in contact with the Great Society. *Library & Information Science Research*. 1991, vol. 13, no. 3, p. 281-300.
 - 25) Chatman, E. A. The information world of retired women. Greenwood Press. 1992, 150p.
 - 26) Chatman, E. A. A theory of life in the round. *Journal of the American Society for Information Science*. 1999, vol. 50, no. 3, p. 207-217.
 - 27) ISIC 基調講演 (文献6) では、規範的行動の理論のみではなく、彼女の研究が通覧されたことは先にみたとおりである。しかし、この基調講演当時、文献28)はまだ出版されていなかった。そのため、規範的行動の理論はこの基調講演で初出である。文献6)を規範的行動の理論を扱う論文としても扱っていることには、このような事情がある。
 - 28) Burnett, G.; Besant, M.; Chatman, E. A. Small worlds: Normative behavior in virtual communities and feminist bookselling. *Journal of the American Society for Information Science & Technology*. 2001, vol. 52, no. 7, p. 536-547.
 - 29) 原ひろみ. アメリカの職業訓練の政策評価—サーベイを通じて—. 労働政策レポート, no. 2. <http://www.jil.go.jp/institute/rodo/2004/002.html>, (入手 2009-06-12).
 - 30) CETA について、日本語で読める文献として、文献29), および、次の文献を参照。求人開拓と職業紹介 (翻訳): アメリカの総合雇用訓練法 (CETA) によるプログラムより. 東京. 職業研究所職業指導研究部 (発行). 1981, 68p. (職研資料シリーズ III-29).
 - 31) 大石 裕. “第4章 マス・コミュニケーションの効果・影響モデルの変遷”. コミュニケーション研究: 社会の中のメディア. 第2版. 慶應義塾大学出版会. 2006, p. 95-130.
 - 32) 佐藤郁哉. フィールドワーク: 書を持って街へ出よう. 増訂版. 新曜社, 281, 32p. 特に、巻末の「文献ガイド」参照。
 - 33) ISIC 基調講演 (文献6) では、オピニオンリーダーはいなかった、と述べられている。これは、後年の Chatman の視点からみての記述で、CETA 研究の時点ではオピニオンリーダーは存在すると判断されている。
 - 34) この引用個所にみられるように、Chatman は社会について、社会的世界、社会的環境、生活世界等、さまざまな語によって言及する。これらの語は、細かなニュアンスの差はあるのかもしれないが、正直に言って、あまり厳密に使い分けられているようにはみえない。本研究では、Chatman の表現に合わせて、論を進めている。
 - 35) 「無力感: ある人が、その人の個人的な、あるいは仕事の環境 (milieu) の中の状況において起こる出来事をコントロールできないとする感覚」「意味を見いだせないこと: ある人が問題となる状況に意味を見いだす能力を欠いていること」「規範を失っていること: ある社会的環境のメンバーが、行為の適切な規範を欠いている状態」「孤立: 孤立した個人は、ある社会的環境の外部の社会 (larger society) の中で高度な価値を見出されている信念に対し、低い価値しか見いださない」「自己疎隔: ある人が、仕事に対し、その人なりの意味付けや誇りを欠いていること」。これらの内容からして、疎外理論は、疎外というよりも、疎外感を扱うものといったほうがより正確かもしれない。ただ、Seeman を扱う研究の中では、疎外理論と訳されていることが多いので、ここではそれに準じた。
 - 36) Garden Tower 研究 ① (文献24) は、Garden Tower の住人のマスメディア利用の実態調査として提示されている。マスメディア利用自体についてはこの論文のほうが詳細だが、本文に述べてあるとおり、Chatman の議論の発展をみる際には、Garden Tower 研究② (文献25) を中心に検討することが適当だと判断した。
 - 37) 社会ネットワーク分析とは異なる。ただし、現在の社会ネットワーク分析の背景とされる研究群の一部はレビューされている。たとえば、Scott, J. *Social Network Analysis: A Handbook*. 2nd ed. SAGE Publications. 2000, 208p. を参照。
 - 38) 以下に述べる内容は、文献10)の田村論文の論述と重なるところがある。Garden Tower 研究についての筆者の読解の基本的な方向性は、同論文で示されているものと軌を一にするものだが、後の

- 議論のため、本研究のここまでの議論をもとに、より詳細な整理を改めて行っていくこととする。
- 39) 文献 10) の田村論文の p. 214 を参考にしながら、より原文の構文に近い形で訳出し直している。
- 40) 彼女がなぜそのような非常に特異な研究対象にアクセスできる立場にあったのかということ、一切述べられておらず、推測につながる材料も残されていない。これは、先行する彼女の諸研究にも大なり小なりいえることで、興味をそそられる点である。
- 41) Wilson, T. D. Information behaviour: An interdisciplinary perspective. *Information Processing & Management*. 1997, vol. 33, no. 4, p. 551-572.
- 42) Chatman 自身、次の Maija-Leena Huotari との共著論文の中で、彼女自身の理論を用いた形ではないが、この考えを展開し始めていたようである。ただし、この論文は組織行動論の文脈に立って提示されており、それまでの Chatman の研究との関係が明確に掴めないことから、本研究では深く立ち入らない。Huotari, M-L.; Chatman, E. Using everyday life information seeking to explain organizational behavior. *Library & Information Science Research*. 2001, vol. 23, no. 4, p. 351-366.
- 43) Schutz, A. “I: 人間行為の常識的解釈と科学的解釈”. アルフレッド・シュッツ著作集第 1 巻: 社会的現実の問題 [I]. M・ナタンソン編. 渡部光ほか訳. マルジュ社. 1983, p. 49-108.
- 44) 池谷のぞみ, “第 1 章: 生活世界と情報”. 情報探索と情報利用. 田村俊作編. 勁草書房, 2001, p. 41-90.
- 45) Garcia, A. C. et al. Workplace studies and technological change. *Annual Review of Information Science & Technology*. 2006, vol. 40, p. 393-437.
- 46) Chatman, E. A. The role of mentorship in shaping public library leaders. *Library Trends*. 1992, vol. 40, no. 3, p. 492-512.
- 47) Chatman, E. A.; Pendleton, Victoria E. M. Knowledge gap, information-seeking and the poor. *Reference Librarian*. 1995, no. 49, p. 135-145.
- 48) Pendleton, V. E. M.; Chatman, E. A. Small World Lives: Implications for the Public Library. *Library Trends*. 1998, vol. 46, no. 4, p. 732-751.
- 49) Dawson, E. M.; Chatman, E. A. Reference group theory with implications for information studies: A theoretical essay. *Information Research*. 2001, vol. 6, no. 3, paper 105. <http://informationr.net/ir/6-3/paper105.html>, (accessed 2009-06-12).

要 旨

【目的と方法】 本研究の目的は、Elfreda A. Chatman の研究視点が情報利用研究に持つ意義を明らかにすることである。本研究は、理論形成期と理論提示期に分けて、Chatman の研究を理解することを試みる。まず、理論形成期の彼女の研究の論点整理を行う。その理解に基づいて、提示された理論の統合的解釈を行う。そのうえで、彼女の研究視点の展開の方向性を考察する。

【結果】 理論形成期の Chatman は、貧困者たちが周囲の対人関係を無制限に利用するのではなく、むしろその関係の維持を常に気にしながら情報探索・利用を行っているという発見に、最終的に到達した。この発見は、情報貧困、そして貧困者の情報探索・利用に対する彼女の視点を、転換に導いた。Chatman は、理論の中で、彼女の新たな情報探索・利用理解を提示した。この理解は、それ以前の情報利用研究とは異なり、「当たり前の、問題のない生活」の維持の一部としての情報探索・利用に焦点を当てる、という独自のものであった。この理解は、相互主観性、そして情報探索・利用と社会の間の相互反映性を扱えるという意味で、情報利用研究に理論的貢献をなした。このことが、彼女の研究視点の一つの意義である。理論以外の Chatman の研究視点の意義として、三つの今後の研究の展開の方向性を導くことができる。一つ目の方向性は、特に組織体の情報探索・利用を扱う形で、分析対象を拡大することである。二つ目の方向性は、知識の維持・利用を描くにとどまった彼女の研究を超えて、知識の作成・修正プロセスを探究することである。三つ目の方向性は、状況と情報探索・利用の相互関係のより詳細な探究である。